
ネズシティへようこそ！

グリコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネズシティへようこそ！

【Nコード】

N9056A

【作者名】

グリコ

【あらすじ】

ベッドの下の間隙——もしかしたらそこには、別の世界が広がっているのかもしれません。

1チーズ目…始まりはチーズ

チツチツ…と、時計の針が動く音だけがしているこの部屋。僕は木製のイスに座って、一人穏やかに本を読んでいた。机の上のコーヒーに手を伸ばし、一口啜ると、苦さが口の中にじわりと広がる。さすがにまだ高校生にブラックはきついみたいだ。読んでいた本を閉じ、僕はイスから立ち上がると、小さな窓から顔を出した。空はすっかりオレンジ色に染まって、家の目の前のスーパーから夕暮れ時の子供と母親が楽しそうに歩いているのが見えた。トントンと指で窓枠をつつきながら、気づいたら僕はその親子が見えなくなるまで、窓に座っていた。馬鹿らしくなり、窓を勢い良く閉めると、履いているスリッパをペタペタと言わせながら、一階へ移動する。キッチンでは母親が夕食を作っていた。わざわざ話しかける理由もなく、そのまま母親の後ろを通り過ぎると、低い冷蔵庫の上で、飼猫のネロが気持ちよさそうにしっぽを持ち上げて横になっていた。引いてあるマットは、母親が冬は寒いから、と100円ショップで買ってきたものだ。ゴロゴロと喉を鳴らすネロを一撫でし、冷蔵庫の中から牛乳を取り出すと、食器棚からコップを取り出し、そのまま2階へ持って上がる。

何やら友達と携帯で騒いでいる妹の部屋を通り過ぎ、『入るときはノックしてね』という札が掛かっている自分の部屋のドアを開ける。

「…上手い！」

ゴクゴクと牛乳を飲み干し、白くなった口の周りをぬぐうと、教科書とノートを一応広げた。だからといって、勉強するわけではないので、丸い消しゴムをいじくりまわして遊ぶ。すると、指で消しゴムを弾いた瞬間、思ったよりも飛んでしまい、消しゴムは行方不明になった。

「…げ……仕方ない」

僕は机の下やイスのした、部屋の床という床を四つんばいで這い回ったが、とうとう消しゴムは見つからなく、最後の砦であるベッドの下に腕を伸ばした。

「だいたいベッドの下ってのはホコリまみれの無法地帯であって本来僕が捜査するべきところでは——ん？」

人が聞いたら引いてしまうであろう独り言を呟きながら、ベッドの隙間に手を差し込んで動かしていると、指先にコツリと何かが当たった。

「…っ…あともうちよつと…」

精一杯に指を伸ばす。しかし丸い奴の身体はコロコロとさらに奥へ転がってしまった。

「…！なんて無礼な…よし」

僕は身体をズイズイと動かし、ベッドの横へ回り込むと、30cmほどの高さの隙間を覗き込んだ。光は差し込まずそこは暗かったが、この高さならギリギリ入れないこともない。屈んで頭を突っ込む。そして匍匐前進とばかりに腕の力だけで進んでいく。

すると案外ホコリはなく、安心して歩を進めると、何やら暗闇が妙に長い。僕のベッドは大きいほうではなく、むしろ小さいほうで、もうそろそろ壁の突き当たりになるはずなんだけど…

「どうなってんだ…」

手を伸ばして探るも、空中をさまようだけで、そこにはひたすら空間があった。いきり立った僕が、一気に前進しようとしたその瞬間、いきなり真っ白な光に包まれその眩しさに思わず目をつぶる。やがて少し経って、ガヤガヤという楽しそうな声が聞こえてきたのでゆっくりと目を開けると、なんとそこには、楽しそうに話し込む、2足歩行をしているネズミ達の姿があった。あるネズミは魚を売って、あるネズミが服を縫って、またあるネズミはチーズを盗んで追いかけられている。遠くに見える2匹のネズミは、どうやら結婚式らしい。白いレースのドレスのようなものを着たネズミと、これまたタキシードのような服を着たネズミ。その周りで、たくさんのネズミ

がチーズとワインでお祝いをしながら踊っている。ふと違和感を感じて足元をみると、そこには小さな爪の生えた足。爪の生えた腕に、フサフサと毛の生えた身体。着ている服だけが、そのまんまだった。この調子で行くと…どうやら僕もネズミサイズになってしまっているようだった。

「――な、なんで…」

「さあさあ貴方もそんなところに立ってないでお祝いに」

ふと、背後から誰かの声が聞こえた。振り向くと、そこには丸い目をクリクリさせて、笑うネズミの姿があった。被っている帽子に青い制服姿。口調・様子から言って、どうやらネズミの警察らしい。

「あの！ここは一体…？」

「は…？ここは我が国、『ネズシティ』ですよ。貴方もこの国の住民なら知っているでしょう？」

「いや…あ、あの…その」

僕が事情を説明する前に、目の前のネズミは驚いたような顔をして、次に誇らしそうな顔をして僕の腕を取った。

「――もしかして迷子ですか？そうですか…よろしい、私の署までついてきなさい。身元を確認してあげます。大丈夫、すぐ親御さんが見つかるはずです」

そう言っていると、彼は意気揚々とそのまま歩き始めた。僕は仕方がなくついていきながら、和気藹々とした町の様子を伺った。ベッドの下にこんな空間があるなんて…。ふと、ガラス屋さんの目の前で立ち止まり、鏡に映る自分の顔を見ると、まさしく全身の毛が逆立った。

「…や、やっぱり…顔もネズミになってる…」

顔を手で抑えたつもりが、短い爪に当たってすりむいてしまった。

「さ、ここです。入って」

「あ、どうも…」

警官ネズミは、木のイスを広げて、長いしっぽを引きずりながら

なにやらコーヒーのような黒い液体を出してくれた。この警察署は思ったよりも広くて、窓口ごとに相談の内容が分かれているみたいだった。天井からぶらさがる木の案内には、『子育て相談所・♀も♂も関係ない!』とか、壁に貼ってある多量のポスターには『チーズ盗みは犯罪です』とか『爪は定期的に摺りましょう』など、わけの分からないものばかりで、唾然としている僕を、警官ネズミは心配そうに覗き込んだ。

「どうしたんです?何か珍しいものでも——?よっぽどひどい目にあつたのですね:だから先ほども記憶喪失のような事を言われて:ささ、早く飲んでくださいよ」

「……」

警官は僕の手にはマグカップを握らせると、ようやく落ち着いて座った。彼はコホンと喉を調子を整えると、黒い棒のようなものをポケットから取り出して、トイレットペーパーのような質の茶色い紙に文字を書き始めた。

「では、身元調査を始めましょう。まず始めに、名前に、家族とご職業は?」

「えーと、名前はユウキです。家族は……母さんと僕の2人ぐらしで、職業は……学生です」

「ユウキ?変わった名前だね君は。まあいい……」

ネズミはそれらをよくわからない文字で紙に書き留めると、さらに質問を続けた。

「ではどうやってこの国に?」

「ベッドの下を覗いたら、何故かこの国に出てきました」

それを聞いた目の前のネズミは、ひげをふにやりと曲げ、思わず黒い棒を爪から落とした。さらに、ふるふると身体を震わせながら、イスから立ち上がった。

「……あ:あなたは……だとしたら……:……」

「どうかしました?」

ネズミは口をパクパクさせ、どこかへ走っていくと、奥の方で電話

をかけているような様子をみせた。ほどなくして帰ってくると、敬愛の目でこちらを見た。

「すみません。国の部隊に連絡させてもらいました。この国では、別の空間から来た方は国の部隊の一員となる決まりがあるので。何故ならそういう方にはなにかしら不思議な能力があるので…」

「何を勝手に…！僕は何の変哲もないただの人…！」

人間、といいかけて僕は言葉を止めた。今の姿はどこからどう見てもただのネズミである。

「何を言っているんです！この国の特殊部隊に入れるのはエリートと別空間からの旅人のみ。とても名誉なことなのですよ！」

ああそうか。私の名前はヒルトン。灰色ネズミのヒルトン・モックです」

灰色ネズミは尻尾を振りながら僕に握手を求めた。先ほどの態度の変わりように僕は顔が、いや、鼻が引きつるのを感じた。

彼が電話してから、すぐさま警察署の前には白いネズミがキキイ言いながら轢く木の荷台のようなものが到着した。中から黒い毛色の、黒い服を着たネズミが数匹出てくると、白いネズミにチーズを与えて、警察署の中へ入り込んできた。

「ここか、行くぞ」

先頭でズンズンと歩いている一際かっぷくのいい黒ネズミが、僕が居る『迷子の子ネズミ』コーナーの前を通り過ぎようとした時、隣に居たモックが手を振って居場所を知らせた。しかし、ピリピリとした黒ネズミの鼻先に小突かれたヒルトンは、その場で目を覆ってしまった。

「やあヒルトン。君からの連絡だったとはね——その、横に居る少年が、別空間からの訪問者かね？？」

「あ、ハイ。そうです…その…キップ隊長」

キップとかいう黒ネズミの、ただならぬ威圧感に、警官モックは弱い目つきで僕を見ると、そそくさとどこかへ行ってしまった。モックの後姿を見ると、キップの周りにいた黒服のネズミが数

人係で僕の腕を掴んでイスから立たせた。

「きみ、ちょっとわが部隊の城まで来てくれるかな？ その——名前は何？」

「ユウキ」

「そう、ユウキ：少し手荒い介抱になってしまいが：君が本当に別世界からの旅人か、信用できないうちは仕方のないことだ」

「：ほんとに」

僕が嘲るように笑うと、キップ隊長の青い目と、ひげが震え、それが合図かのように黒ネズミ達は僕に頑丈な草で作った手錠のようなものをかけた。なんでネズミの世界に来て逮捕されにやいかんのだ：納得しない僕を、ネズミ達は問答無用でワゴンへ積み込むと、キップ隊長は隣に座り、先頭に座っている痩せたネズミに何やら指示をした。すると痩せネズミはワゴンから繋がれている白ネズミに鞭を一発入れた。途端に彼らはチュウチュウとわめきながら走り出し、その勢いで思わずワゴンから落ちそうになる。

「うわ：っ！ おい！ 同じネズミ同士なのになんでこんな扱いしてんだ！ ！」

「……」

隣のキップ隊長は、被っている黒い帽子を少し動かしただけで、あいかわらず流れていく町の風景を眺めていた。

「おい！」

「ユウキ。少し黙ったらどうだ？ それに彼らはネズミではない」その言葉に頭の芯が沸騰するのを感じた。手首と手首を繋いでいる草を、力で引きちぎると、慌てる黒ネズミ達を差し置いて、隣の澄ました顔したネズミに詰め寄った。

「何をわけのわからないことを：どう見たって、彼らはネズミだしあんたもネズミじゃないか——」

それを聞いたキップは、険しい表情で牙をむくと、いきなり僕の上に馬乗りになった。

「黙れ！ 彼らはこの国でもっと身分の低い白い獣の一族だ。しゃ

べれない、2足で歩けない。これのどこがネズミなのだ!？」

フーフーという、荒い息使いとともに、キップは僕の上からすぐに退き、僕は黒ネズミ達によって再び手錠をかけられた。今度は何重にも草をまかれ、少し手首は窮屈になった。

しばらくワゴン内は無言のまま、ピシピシという鞭の撓る音だけが響いていた。

「……」

僕はもう帰リたかった。帰ったら母さんが夕食を作っていて、好きなテレビを見て大笑いをして、そのまま気持ちの良いベッドで寝れるのに……今の状況は、ネズミに捕獲され、ネズミの部隊に入れられそう、さらにネズミのお偉いさんを怒らせた。

「……最悪だ……」

ネズミだらけの悪循環に、おもわず頭を抱えたが、次の瞬間ワゴンの揺れが止まった。

「ついたぞ、ユウキ。ここがわが特殊部隊用の居住区だ。少し狭いが、我慢してくれ」

そういわれて、頭を上げると、思わず口からため息が漏れた。そこは、中心街からは離れているが、まだ町の中にも関わらず、見上げるばかりの高く細い大木が2本隣り合って生えていた。さらに大木と大木の間を繋ぐ枝のようなものから、水がザァザァと流れ落ちて、その下の地面には水たまりのような湖ができ、その場所ではいろんなネズミが洗濯物(?)を洗っていた。

「……うわぁ」

黒ネズミ達に催促され、根元の方でポツカリと開いている木の入り口から内部へ入ると、なんと天井は動いていた。木の細胞のようなものだろうか、ドクンドクンと波打つ天井を凝視していると、キップが僕を呼んだ。

「ユウキ、ちゃんと付いてきて貰わなくては困る」

「……」

先ほどのことが頭に残っていた僕が俯いていると、いきなり傍に居

た数匹の黒ネズミが僕を抱きかかえた。

「今日は木の活動が盛んなようだ！しっかりついてこいよ！」

何の事かと思っていたら、一際大きな黒い帽子を被ったネズミが近くの床から天井まで吹き上げていた、液体の柱のようなものの中へ飛び込んだ。液体の中に入った黒い身体は、一瞬のうちに天井まで舞い上げられて見えなくなった。

嘩然としていると、それと同時に僕を抱えているネズミ達もその中へ飛び込もうとする。

「うわぁ！まだ死にたくない！やめて…やめろ…神様…！」

必死でもがくも、次の瞬間僕の視界は一気に青と緑の世界になった。ゴポゴポと、水流のような強い流れに、飛んでいきそうな浮遊感。思わず、口の中に溜めていた空気を吐き出してしまった。

「い…息が…」

必死で液体を飲みこまないように、口を閉じていたが、ふと、耳元でネズミが何かを言っているのが聴こえた。

「ユウキさん。ここは呼吸が出来るんですよ」

「…！？」

それを聞いて、僕はどうせ死ぬなら呼吸がしたいと、思いっきり液体を吸い込んだ。

すると、こういうことか、あっという間に苦しくなくなった。さらに、周りを見ると、なんと透明になっていて、木の中を地上から液体の流れによって、どんどん上に上がっているのがはっきりと分かった。

「…これ、どうなってるんだ…？」

傍に居たネズミに聞くと、彼らは嬉しそうに尻尾を振って答えた。

「この流れは、この大木の血液のようなものです。この液体には酸素は豊富に含まれていますし、外傷を癒す効果もあります。だから私達は、いつもこの液流に乗って、最上階までつれていってもらうのです」

それを聞いて、僕は目を閉じると、久方ぶりに全身の力を抜いてみ

た。手や足から、疲れが抜けていくような感じがし、静かに耳を澄ますと、コポコポという何かが湧き出るような音する。何だか、揺り籠に乗っているような、暖かい何かに包まれているような、そんな感じがした。この感覚——いつか、どこかで…？

「起きろ！ユウキ！もう最上階だ！」

そんな僕の甘い感情は、ネズミ達に通じるわけもなく、強引に起こされると、そこは本当に最上階だった。地上は遥か下のほうにあって、むしろ木のとっぺんについている葉っぱの方が近い。

「どうやら…ずいぶん気持ちよかったようだな。バブルフレッシュヤーが」

「ああ、あの流れのことバブルフレッシュヤーっていうんだ？」

僕はすっかり軽くなった身体を伸ばし、緑色の天井をみながら、ネズミ達の後に付いていった。

やがて突き当たりになったそこは、葉っぱの文字で『特殊部隊用』と書いてあった。

「…入りました。今日から君はわが部隊の一員だ」

「え…？何か取り調べとかないのか？」

黒ネズミ達に手首の草をいじりられながら僕が聞くと、黒いネズミは大きな帽子を取って冷たく鋭い目で笑うとこう答えた。

「先ほどのバブルフレッシュヤーが一番の選別方法だったんだよ。

あの流れには、よほど訓練されたエリートか、この国の者ではない奴しか乗れないのだ。もしそれ以外の奴が乗ると…途中でおぼれて死んでしまうからな」

僕は涼しい顔で悲惨なことをぬけぬけという目の前のネズミに呆然とした。彼はそんな僕を見てやさしく微笑むと、握手を催促した。

「私はキップ・リバーズ。特殊部隊隊長だ。よろしく」

「は…はあ」

何はともあれ、手錠ははずされ、すっかり赤くなった手首と共に、僕は特殊部隊と呼ばれるものに強制的に入れられることになった。

2チーズ目…森の番人

「基本的な説明は同じ部屋のステイックとアランに聞いてくれ。それでは、明日は早いからな！早く寝ろよ」

「はい！」

僕の代わりに、ニコニコしながらキップを見送る2匹を見比べてみる。片方は身体は白いのに耳と鼻は黒い不思議な毛色をしたネズミ。もう片方は茶色のような、どちらかというとハムスターのような形をしたネズミ。

「おい新入り！」

「は？」

いきなり怒鳴るようにして話しかけてきたのは茶色毛のほうだった。僕は身体を全て覆えるほど大きな葉っぱの布団を見ながら、一応耳を傾ける。

「は、じゃないだろ！俺はステイック！一応この部屋の主任だ」

「っていつても3匹しかないけど」

「…それを言うなって、アラン…」

ステイックは自らの長いしっぽを持ってモジモジするような仕草をした後、振り返ってアランと呼ばれるぶちぶちのネズミとこしょこしょ話を始めた。僕は葉っぱのハンモックを作ると、早速横たわった。透けている木の壁から見える広い空は、もうだいぶ暗くなっていた。どうやらこちらの世界では夕日というものがないらしい。

「…：…だろ？…分かったか？」

「でも…：…うん。…そうだな」

2匹はしばらく話し込んだ後、笑顔でこちらに向き直り、早く寝ようとはばかりに僕のハンモックの中へもぐりこんできた。チクチクと当たる毛に嫌悪感を覚えながらも、ネズミに話しかけられること自体にはほとんど違和感がなくなってきたので、そろそろ末期症状かと思いながら、じきに僕はしゃべりたてる2匹のネズミの声と共に

に、ウトウトと深い眠りに落ちていった。

ガタガタと身体を揺さぶられる感覚に、重い瞼を開けると、僕を覗き込むスティックの姿があった。

「早く起きろ！遅刻しちまうぞ！」

「えっ……」

思わず起き上がり、外を見ると、空はすっかり明るくなっていた。どうやらこの国には、早朝というものもないらしい。

「ほっとけよスティック！そんな奴にかまってたら……自分も遅刻してぶん殴られるぞ……！！」

カチャカチャと爪の当たる音をさせながらアランが黒いズボンのようなものを履いている。ハンモックから飛び降りて、はたと気づく。

「着替えがない……！」

僕が叫ぶと、スティックが大慌てで制服のようなものを持ってきた。それは昨日僕をここに連れてきたネズミ達が着ていた、黒い服にそっくりだった。いよいよ僕も部隊の一員らしい。

「そら、いそげっ」

床から盛り上がった木の細胞の上においてある、結われた葉っぱの皿に盛られたパンを摘んで、部屋を飛び出し、今度は下に噴出しているバブルフレッシャーに入る。

ブクブクと震える青い泡が身体にまとわりつき、鮮やかな緑の液体に乗って、急降下していく身体。バブルフレッシャーから見える景色は、まさに絶景で、下のほうには点々と町が見え、地平線の向こうに見える景色は、砂漠に見えた。バブルフレッシャーから軽やかに降りる。だいぶ感覚がつかめてきた。まだ疲労の残っていた身体はあっという間に軽くなり、急いで木から出ると、湖の横にある広場のような場所に、厳しい顔をしたキップ隊長と、数十匹の黒い制服を着たネズミ達が、並列していた。

「すみませんキップ隊長……！」

横で走っていたスティックとアランが、声を揃えて敬礼したので、

僕もそれにあわせて一応敬礼する。

キップ隊長はため息をつく、早く隊列に加われという風に手を動かした。

急いで列の一番後ろにつくと、キップ隊長は少し高い丘に立つと、ズボンから小さな葉っぱを取り出し淡々と読み上げ始めた。

「えー…今日の任務だが。非常にいいにくいのだが、白ネズミ…失礼、白い獣、の里に『モルラット』が現れたとの事…至急応援部隊を頼むとな…」

途端に部隊からはため息のような、哀愁漂う声が漏れた。ふと、僕は昨日の隊長の行動を思い出していた。

「なあ」

「ん??」

僕は隣で悶々とした表情をしていたスティックに聞いてみる事にした。

「その…白い獣って、そんなに変な生き物なのか？」

「…うーん。実は俺にもよくわからないんだ。隊長が何故あんなに毛嫌いしてるのか…ただ」

「ただ？」

スティックが次の言葉を口に出そうとした瞬間、隣でキップ隊長ばかりを見上げていたアランがこちらを見据えていった。

「スティック、それ以上隊長を侮辱するような事を言うと絶交だからな！いくら親友だからといって——」

ぶちぶちの毛を逆立てながら、ギラギラとした目つきでアランはスティックのしっぽを掴むと、ブンブンと振り回した。スティックは高い声で一鳴きすると、アランのぶちの耳を掴んでこね回した。本気で喧嘩をし始めた2匹を見て、周りの兵隊達は迷惑そうにしていたが、やがてキップ隊長が黒い帽子を動かし、パチンと指を鳴らすと、次の瞬間、周りの黒い列は一斉に動き、何故か僕とスティックとアランが一番先頭になるような隊形に並んでいた。

「しまった…！」

「……今日が命日か…」

「??」

ズンズンと丘の上から降りてきたキップ隊長はこちらを見ると、珍しく微笑んで、黒い隊列は一斉に歩き始めた。

ゆるやかに流れていく町の景色を見ながら、僕は少し腫れてしまったしっぽの根元に息を吹きかけるスティックではなく、今度はアランに質問した。

「なんで、先頭になると命日なんだ？」

「?? お前、そんな事もわかんないのか!??…まあいいや。この隊列はな、化け物と戦うまでずーっこの隊列で動く。だから化け物と出会って真っ先に戦わなくてはいけないのは、キップ隊長と俺らということになる。だから、もしかしたら今日が命日かもしれないってこと!」

「その通り、用心しろよ」

ふいに、先頭を歩いていたキップ隊長が鋭い目つきでこちらに振り向いた。途端にアランの目が輝き、スティックはビクリと身体を強張らせた。凜々しい黒い毛を揺らしながら、自らの鋭い爪を見つめると、隊長は視線を遠くへ向けた。

「例えば、あそこ。あそこには何が住んでいると思う?」

隊長が指差した先は、隊が進む道の横から広がる、白砂の大地の遥か遠くにある場所だった。砂嵐が吹き荒れていて、良く見えないが、何やらその地域だけ草原のようになっている。

アランはいきり立った。

「ハイ! あそこは『シャローナ草原』と言って、主な生息動物は草食性の『ムクリナ』しかいません! 奴らは基本的に動きが鈍いです。とぼけたような顔をしています。しかし、たまにやってくる捕食動物の『ロイド』と『ガルバン』はとても凶暴です。特殊な我々といえど勝算は高くないでしょう…」

「よろしい。完璧だアラン!」

キップ隊長に拍手をされて、手を上げてよろこぶアランを尻目に、

周りの風景は、何もない場所から徐々に道に生えている木の数が多くなり、やがて生い茂る森の入り口まで来た。

「…ココから先は危険地域です…一般の方は入らないで下さい…」僕は入り口に立ててある木の看板の文字を読んだ。隣でスティックの喉がゴクンと鳴った。

森の地面ではいろんな木の太い根っこが入り混じり、我々は短い足でそれらをまたがなければならなかったし、時々ま道を横切ろうとする馬の身体に鳥の細長い首がついたような生物が、キップ隊長の鼻を突付こうとするのを断固阻止しなければならなかった。さらに木から木へ飛び移る長い手足の、茶色い毛色をした生物は、同じ毛色のスティックを見て、仲間と勘違いしたらしく、彼は危うくその生物に拉致られそうにもなった。

「危険だ！ 実に危険すぎるぞ！ この森——」

「うん…」

茶色の動物に、木の上から直に落とされたスティックは、腫れるしつぽと鼻を押さえ、泣きそうな声で泣きわめいた。

そんな様子を、隣でアランが冷ややかな目で眺めていた頃。キップ隊長が立ち止まり、地図のようなものとある一点を見比べながら、何か考え込んでいた。

「うーむ…」

「どうなさったんです？」

3匹で彼の見ている場所を見ると、そこは道が2本に分かれていた。道の分岐点には、『モルラットの巣』と『白ネズミの里』とかいてある看板が吊るしてあったが、肝心な事がかいてない。

どちらが、どちらの道なのか…

「…右じゃないですか？」

「いや、左だろう」

「絶対右だ！！」

「いいや、左だね！！」

言い争うぶちと茶色のネズミを見ながら、キップ隊長はひらめいた

ような顔をした。

「ああそうだ！先に『モルラットの巣』に行けば、あの汚らしい白い獣に会わないで、居住区に戻れるではないか！そうだ、そうしよう！さあ、モルラットを倒しに行くぞ！皆準備しろよ」

キップ隊長は指をペロリと舐めると、風下へ向けた。

「：よし、こっちだ」

キップ隊長は右の方へズンズンと進んでいく。隣で凍り付いているスティックに、僕は不思議に思った。だって特殊能力があるから特殊部隊に入れたんだろうし——『モルラット』って、そんなに強いのか？聞いてみるしかないな。

「キップ隊長、モルラットってそんな強いんですか？」

一番先頭を進む隊長の耳がピクリと動き、首だけ動かしこちらを向いた。僕より一歩下がって進んでいたアランが、思わず僕の肩を掴んだ。

「何を言ってるんだお前！『モルラット』は古くからこの森の番人として恐れられている動物だ！鋭く大きな爪は大木をもなぎ倒し、その硬い身体は何も通さない。全力で行っても倒せるか倒せないか、スティックだって、入隊した手の頃、『モルラット』に殺されかけたんだぞ！」

アランは表情が引きつっているスティックを指差した。そういうもんか、と僕は頷いた。何故スティックが是ほどまでに怯えているのか、ようやく分かった気がしたから。

「：ユウキ。そういうことだ、君が入隊して初めての戦いが『モルラット』とは、些か不憫に思うが。だが、私は特別扱いなどしない」

「わかってます」

僕は自らの爪を見た。標準サイズ。ヒルトンさんは、別空間から来た人には必ずなんらかの特殊能力があると言った。僕にもあるのだろうか、何か特殊能力が——：

「ギギギギギギ」

「!？」

突然地面がボコリと盛り上がった。僕は足元に感じる硬い何かを気にしながら、そのまま地面から数メートル上までもっていかれた。

「単独のモルラットだ!! 全員戦闘体勢へ突入しろ!! ユウキ! お前はそのまま奴の身体にくっついていなさい!」

僕に命令をすると、キップ隊長は目を閉じて立ち止まった。後ろで控えていた黒い軍隊はそのままモルラットになだれ込んだ。噛み付いたり、爪を食い込ませたりするも、鱗のような硬い身体には全く効かず、モルラットは、その大きな爪でネズミ達を一匹一匹確実に踏み潰した。そのたびに彼らの悲鳴が自分の耳に届いた。

「くそ……!!」

僕は掴んでいたモルラットの頭の部分を握り固めた拳で、ぶん殴った。すると骨と骨が直にぶつかり合う衝撃が来て、モルラットは甲高い悲鳴を上げて一気に倒れこみそうになった。

「ユウキ! お前すんげえ力してんだな!!」

下で土まみれになったスティックが、嬉しそうにこちらを見上げていた。僕は自らの拳を見つめた。いつの間にこんな力がついただろう。思い切ってモルラットから飛び降りる。地面に着地すると、自分でも何が起こったか分からないほどのスピードで、モルラットの正面へ回り込んでいた。

「ユウキ! 何して——」

「うらああ!」

思いっきり地面を蹴ると、身体はグンと加速して、僕はそのままモルラットの顔にハイキックを食らわせた。モロにそれを浴びたモルラットは、宙に舞い上がると、そのまま遠くの切り立った崖のような場所に叩きつけられ、倒れこんだ。

「……!! ユウキ……!!」

「——やった!」

歓喜のあまり、拳を振り上げた瞬間、近くに居たスティックの顔が恐怖に歪んだ気がした。

「ギ：ギギギギギ！」

しまった、と振り向いた時には、もう遅く。2匹目のモルラットの
とがった角が、僕の背中を突いた。

「ケハッ……！」

ドサリと倒れこみ、霞んでいく視界の中で、頭上のモルラットが爪
を振りかざした。

「……これが命日か……」

すると、何故か、目の前に居たモルラットが、いきなり吹き飛んだ。
上から勢い良く黒いものが飛んできたと思ったら、黒い毛に凜々し
い顔立ち。それは紛れもなくキップ隊長だった。彼の身体はかすか
に光ったと思えば、爪、牙、身体、全てが巨大化、鋭利化し、いつ
もの青みがかった目は、まっ黄色に染まりギラギラと光っていた。
さらに黒い身体は目にも止まらぬ速さで走っていくと、崖の近くで
倒れこんでいたモルラットをその鋭利な爪で、楽しそうに笑いな
がら引き裂いた。そして僕を殺そうと執念で立ち上がろうとする、2
匹目のモルラットを察知すると、黄色い目を見開いて唸った。そし
て自らの口を大きく開け、巨大化した牙でモルラットの喉物に噛み
付くと、そのまま引きちぎった。

「た：隊長……？」

僕の意識は、そこで無くなった。

「…キ、ユウキ。おい、ユウキってば、起きろ」

「…う、ん…」

誰かの心配する声で目を覚ますと、そこは洞窟の中だった。ピチャ
ン、ピチャンと、水滴が零れ落ちる音だけが響いていて、天井には
氷柱のようなものが突き出している。外から光は入ってこず、焚き
火の炎の周りだけ照らされて居た。隣には負傷した兵士が寝ている。
どうやら僕を起こしたのはスティックらしい。身体を起こすと、背

中にピシ、と痛みが走った。思わず顔をゆがめる。どこから、スティックが葉っぱの器を持ってきた。

「ほれ、夜ご飯だ。今日は葉野菜のおかゆと小魚2匹に、小麦粉スープ」

「ありがとう…」

ほくほくと湯気の上がるおかゆを啜ると、身体の芯から身体があつたまった。

「…隊長は？」

「ああ、隊長は久しぶりに特殊能力を発動したから、疲れて眠ってるよ。特殊能力を発動したら、だいたい2、3日は身体を休ませないといけないんだ。…お前が気絶した後、隊長次々に現れたモルラットを一人で全部やつつけたんだぜ、特殊能力を発動した隊長は…驚くほど強いけど、やっぱりあの目は怖いよなあ…」

「…うん」

確かに、あのときの隊長は、隊長ではないみたいだった。あれじゃあまるで、ただの殺戮を楽しむネズミだ。

「まあいや、ここはモルラットの巢の洞窟だけど、隊長が全匹倒したから安全なはずだよ。さあ…もう外は夜だ。明日からに備えて寝よう——」

スティックはそう言って、僕に葉っぱの布団を渡すと、隣で爆睡しているアランのずれかけた布団を戻した。

「そう、だね」

僕は小魚とスープを一気にすすると、その夜は早々と床に就いた。

翌日。黒い隊列は朝から洞窟内を移動していた。洞窟内は妙に静かで、スティックが大あくびをする声が、一際大きく聴こえた。先頭を進むキップ隊長に、昨日ほどの張りはなく、いつも光沢のある艶やかな黒い毛は、しなしなとなびいていた。

「…静かすぎるな」

「……うん」

カツカツと、兵隊が履いている金属製の靴が擦れあう音が洞窟内に反響する。隣で眠そうなアランは目をこすりながら、ステイックは気の抜けたような顔で、もう任務は終わったという雰囲気、隊列を包み込んでいた。そろそろ外の空気の匂いがし始めた頃。突然、地面がガタガタと揺れ始めた。

「何だ……！？ キップ隊長！ これは一体……」

「……まさか、まだ残っていたのか——」

キップ隊長は苦々しい表情をした。そして地盤が割れる音がしたかと思うと、隊を囲むように巨大な5匹のモルラットが現れた。

「……どうする」

「逃げるが吉」

5匹のモルラットは、全方向からジリジリとよってきて、隊は縮んで震えているしかなかった。一匹だけでも大変なのに、さらに4匹追加されて、頼みの隊長はまだ体力が回復していない。

アランは洞窟の壁に貼りつく、そのまま上っていかうと試みたが、あっけなくズルズルと落ちてきてしまった。ステイックは焦ってばかりで、まともに目の照準が合っていない。

「こうなったら、僕が行くしか……」

「待て、やめなさいユウキ。君が行ってかなう相手ではない。昨日、身に染みて分かっているはずだろう？」

「……だ……」

すると一匹のモルラットが、不意にアランをしっぽを掴んだ。

「うわぁ！」

アランは悲鳴を上げるとそのままモルラットの領域へと引き込まれていった。モルラットはアランのしっぽを掴んだまま、彼の身体を何度も地盤に叩きつけた。

「やめろお！ アラン！ アラン……ッ」

ステイックは、血走った目で叫んだ。僕はそのとき、自分の目がかしくなったのかと思った。だって、ステイックの身体が、昨日の

隊長と同じような光を帯び始めていたからだ。

まさか、スティックも昨日の隊長みたいに：

モルラットは、気絶したアランの片腕を掴み、ブンブンと勢いをつける、そのまま洞窟の壁にたたきつけた。

アランの額からはうっすらと血が流れ出し、そのまま洞窟の隅の方に倒れこんでしまった。

「――！！」

それを見たスティックの身体の光は、より強さを増した。キップ隊長が、彼を落ち着けようとした瞬間。洞窟内に、スティックの唸り声が響き渡った。隊のネズミ達は、あっけに取られている。

僕は、スティックの後姿を見ているだけで、今の彼の表情は見えない。しかし、背中から滲み出る怒りと、絶え間ない殺意だけは、ピシピシと伝わってきた。

「：スティック：？」

すると彼は、立っている地面に手を当て、地面を引っ張り始めた。すぐにメキメキと、岩が盛り上がったと思ったら、ボコンと大きな音がして、大きな岩がくりぬかれた。スティックはそれを頭上で持ち上げると、アランを気絶させたモルラットの方へぶん投げた。岩はモルラットに命中し、そのまま気絶してしまった。

「ひやははははは」

奇妙な笑い声と共に、スティックは次々と岩を地面からくりぬいてモルラット達へ投げつけた。どんどん岩の山が出来、モルラット達はそれに埋もれていった。砂ぼこりが立ちこめ、モルラットの悲鳴と共に天井まで届きそうなくらいの高さの厚い岩の壁ができあがった。静まり返る洞窟内。

「とてつもない：破壊力と腕力：」

啞然として見ている隊員と僕とは正反対に、キップ隊長だけは冷静だった。

「：しかし、あれしきの攻撃でモルラットが死ぬわけがない」

その言葉と呼応するように、激しい音を立てて岩が粉々に砕け散っ

たかと思えば、鋭い触手のようなものが飛んできて、スティックの身体に巻きついた。

「ギギギギギ！」

「離せ！この……！」

スティックはぎらついた目でもがいていたが、他のモルラットからも触手はドンドン伸びてきて、スティックは身動き一つ取れなくなっていた。

アランを気絶させ、スティックをも食い殺そうとするモルラットは、嘲るように鳴き声を上げた。

「助けないと……隊長！」

僕は駆け出そうとしたが、またも隊長の手によって止められた。抗議をしようと、キップ隊長を睨んだ時、あるものが動くのが見えた。

「……離せ！この……クソが！」

スティックが、なんとか逃れようと腕に力を入れた瞬間、触手の締りが急に緩くなった。

「！？」

スティックが素早く地面に着地し、モルラットがわめいている方向を見ると、そこには太く尖った岩を、モルラットのお尻に突き刺している黒服の隊員の姿があった。

「……！！」

しかし、それを見て、スティックの身体の光が弱まったその時、別のモルラットの口が隊員の身体を丸呑みした。

モシャモシャと、口を動かす度に、こちらを見て嘲け笑うモルラットに、スティックの身体の光は最高潮に達した。

見ているのが眩しいくらいに、身体が光ったと思えば、洞窟全体が揺れ始めた。

「何が……どうなってるんだ——！？」

僕は地面から突き出た氷柱を必死で掴んだ。何もしでは立っていないほどの揺れ。隊員達もそれぞれ固まってキップ隊長を守っ

ている。

地面の揺れがこれでもか、というほど激しくなったそのとき、モルラットの頭上の壁が丸ごと崩れ始めた。それどころか、洞窟全体が崩壊し始めている。スティックの方を見ても、光を放っているだけで、全く逃げようとしない。自分達の頭上からも、次々と岩が崩落してくる。

頭上を見上げたそのとき、ガン、という音と共に一際大きな岩が僕の上に落ちてきた。

3 チーズ目…ロイドの願い

モルラット達の断末魔と共に、僕の視界は真っ暗になった。

ところが、身体が全く痛くない。どうやらこの岩盤には、くぼみがあったらしく、それが僕の身体をガードしてくれたみたいだ。

しかし、落ちてきた衝撃は想像以上に激しく、すぐに僕は気絶した。

ピチュピチュと何かに頬を舐められる感覚がして、僕は目を覚ました。するとそこには、かばに毛を生やしたような変な生物が僕を見つめていた。

驚いて立ち上がり、辺りを見渡すと、そこは見渡す限りの草原が広がっていた。変な生物も数百匹の群れで草を食んでいる。先ほどまで洞窟にいたはずなのに、なぜこんな場所にいるのだろう。隣で気絶している兵士を起こして回ると、その中には、スティックもアランも、キップ隊長もいた。

すっかり額から流れる血も止まったアランは、横で鳴いている変な生物を見て表情を曇らせた。

「……ムクリナじゃないか、何でこんなところに」

「え？この変な生物…が、ムクリナ？」

アランは頷くと、隣で爆睡しているスティックを見て立ち上がった。

「昔図鑑で見たことがある、間違いないこの生物はムクリナだ。大人しい気性に珍しいものを見るとすぐ舐める…」

アランはあたりを見渡すと、驚いた表情でもう一度ムクリナを見た。

「見渡す限りの草原にムクリナ…先ほどまで森の洞窟にいたのに…なんで…」

僕は青い空を見上げた。すると、何か黒い影がこちらに向かってくるのが見えた。

「アランさん、あれ。何ですか？」

「…ロイド」

アランは自分の言った事が信じられないとばかりに、口を押さえる仕草をした。しかし、間違っていないことに気付くと、顎に手をあてて

「それにしても——洞窟からシャローナ草原に一瞬で飛んでくるとは…」

と、呟いた。

それを聞いて、周りの兵士達が騒ぎ始めた。キップ隊長が必死で収集をつけようとしている。

「冗談じゃない！今俺達の中で、充分に戦える奴がどれだけいると——」

「…いるさ」

キップ隊長は、青い瞳でアランを見据えた。

「…アラン、兵士も私もスティックも、先ほどの洞窟での戦いで体力を消耗しすぎた。だから、隅の方で気絶していた君でしか、ロイドと戦えるものはいないんだ、辛いだろうが…頼む」

「わかってます隊長。俺はまだまだいけますよ」

アランは徐々に大きくなってくる影を見上げた。次に、キップ隊長は僕を見た。

「ユウキ。お前もまだ行けるだろう。アランの護衛をしろ」

「あ…ハイ！」

ムクリナは飛んでくる影をようやく察知して、一斉に移動をし始めた。アランと僕は座り込んでいる隊の前程に立った。僕は何か故かワクワクしていた。森といい、洞窟といい、何かとキップ隊長に止められて、中々自分の実力の判断をしかねていたからだ。指をならすと、隣のアランに話しかける。

「あれ、ほんとにロイドで間違いないですか？」

「…ああ、少し生えたときかに、目の周りの赤と黒の模様。ガルバンよりは小さな体。ロイドに間違いない」

アランはそう答えると僕を睨んだ。

「くれぐれも、足を引っ張るなよ新入り！」

「分かってます」

影が大きくなった、と思ったその瞬間、僕とアランの間を物凄い速さで何かが駆け抜けていった、直後にブオン、という音共に、強い風が吹きぬけて、僕は思わず尻餅をついた。

「み、見えなかった…」

飛び回る影を必死で目で追うが、中々その姿は見つからない。

「当たり前だ。ロイドの特徴はその恐るべき瞬発力。お前の能力では勝てない。だが安心しろ！」

アランはそう言うのと静かに目を閉じた。すると僕はまた妙な感覚にとらわれた。アランの身体が、やはり光り始めたのだ。

「アランさん——」

思わずとめようと立ち上がったその瞬間。激しい音をさせながら、渦を巻いて、立つ巻きの様な風が吹き荒れた。思わず草原にへばりつく。身体に突き刺さるような暴風は、僕の体の毛という毛を揺らしまくった。

「さあ来い…！」

目を凝らしてみると、激しく吹き荒れる風を中心に立っているのはアランだった。ロイドは、空中でしばらく様子を見ていたが、すぐにアランめがけてその鋭い口ばし突き出し、一気に急降下した。

「あぶな——」

急いで草原の地面にはいつくばりながら、風を巻き起こすアランに近づいていく。頭上を見上げると、ロイドは羽をばたばたを動かしているが、何かの気流によって動けなくなっていた。キィキィとわめき声を上げている。

「すごい…」

僕は思わず歓喜の声を漏らした。しかし、次の瞬間。目の前の巨大

鳥は目をギラつかせると、羽を激しく動かして周りの気流を追い払ってしまった。さらに突発的な速さでアランの目の前に現れると、その口ばしでアランの身体を貫いた。

「グアッ…！」

「…！！」

ロイドは素早く突き刺さった口ばしを抜くと、また遥か上空へと舞い上がってしまった。草原の真ん中で、血が止まらない腹を押さえながら、アランは苦しそうに僕を見た。

「ユウキ…こっちへ…来い」

「え」

アランは、僕が来たのを確認すると、自らの手に風を集め始めた。先ほどまでの、草原の真ん中の草を吹き飛ばすような、激流が、手の周りに集約されていく。渦をまきながら、円のような形になった風。そしてアランは空を見上げて呟いた。

「発射砲だ——お前、空に打ち出される勇氣があるよな？」

「発射砲？」

アランが立ち上がると、腹から流れ出る血がボタボタと地面に落ちた。それを見て、僕は息を飲んだ。普通これだけの怪我を負ったら、気絶するか立ち上がれないか、まして戦いなんて出来るわけがない。特殊能力に共通する点——それは、発動したら、狂気なまでの戦闘意欲が発揮されること…

「言い訳する事は許さない。早く俺の目の前に立て」

血走った目でアランは僕の背中を押し、自分の目の前に立たせた。

僕は覚悟を決めた。ここで死んだら、それまでの命だったという事だ。あの鳥を倒せるのは、今は僕しかない。

思わず、身体に力を入れた、次の瞬間には物凄い風圧で背中を押された。空中にはじき出されるようにして僕はネズミ発射砲になった。グングンと青い空に舞上がる。下は見えない。絶対怖くなるから。

ロイドのバサバサという羽音と鳴き声が聴こえた。と、思ったら僕の目が一瞬鳥の姿を捉えた。この速度、角度で行けば…！

バシんと、何かを掴んだと思ったら、それはロイドの足だった。そう、僕は見事にロイドを捕らえたのだった。

「キィ！キィ！」

必死で僕を落とそうと、ロイドは身体全体を振るわせたが、僕はその揺れる反動で勢い良くロイドの足から背中へと移動した。しつかりと、首の根元を掴んで、振り落とされないようにする。地上のアランを見た。するともう身体の光はなく、草原に座り込んでいた。兵隊とキップ隊長がすぐに駆け寄って介抱していたんで、命に別状はないだろう。しかしこれで、事実上僕を助けてくれる人はいなくなった。ビュンビュンと四方に飛びながら、僕を落とそうと試みるロイドに叫んだ。

「なあ…いい加減、止まってくれよ！」
すると、すぐに何かの声が聞こえた。

〔黙れ…〕

「…？？」

声は、実際に聞こえているわけではない。頭の中に入り込んでくるような、そんな感覚だ。

「誰だ！」

僕はあたりを見渡した。しかし青い空が続いているだけで、何もいなかった。

〔私に決まっているだろう小僧…！〕

「…ロ、ロイド…がしゃべった…」

僕は呆然とした時、何故かロイドは地面に向かって急降下した。落ちないようにながみつくのが精一杯だったが、やがて勝手にロイドの言葉が頭に流れ込んできた。

〔ガルバン…ガルバンだ！〕

「——なんだって！？」

ロイドが見ているその方向。そこには、大きく太い首に、硬い足にはでかいかぎ爪。口には何頭ものムクリナを咥えて飛んでいる、ロイドよりもさらに巨大な鳥の姿があった。その長い尾は、赤と青と

黄色と：様々な色が混じって、美しく光っていた。例えようなない存在感と、圧倒的な力。

「……」

僕はガルバンに見とれていたが、ハタと、気が付いた。ロイドのほかに、ガルバンをも倒さなければいけなくなったのか：ムクリナを美味しそうに食べるガルバンを見て、僕はある作戦を思いついた。ロイドに話しかける。

「なあ、お前の望みを教えてくれ」

「……私の望みは……」

ロイドはバサバサと羽を動かし、大空へ舞い上がった。そして見渡す限り草原の大地。ロイドが見据えるその先には、巨大な1本の木が葉っぱを揺らしていた。

「あの木に巣を作っている私の仲間達の飢えを、なくしてやりた
い：一際凶暴なあのガルバンのせいで、我々のエサであるムクリナ
は減少の一途を辿るばかりで、昔は数千頭いたムクリナは、今や数
百頭にまで減ってしまった……」

「……なあロイド」

僕はロイドの毛を握り締めると、覚悟を決めた。この状況を切り抜けるには、この方法以外にはない。

「エサ。僕が用意するから」

「……なんだと？」

ロイドが羽ばたくたび、風が僕の頬を撫でてる。

そう、僕は居住区のどこかで、破産したムクリナ養育場の処理をSOSするチラシを見た気がしていた。数が増えすぎて困っている……と。

「我々の数は、ざっと100を超えるだろう。それでも用意できるといえるのか？」

「ああ」

それを聞いたロイドは、是までにないほどの大きな声で鳴いた。キィィィという超音波のような鳴き声が、草原中に響き渡った。す

ると、ロイドの巣である巨木の葉っぱがザワザワと揺れたかと思えば、一斉に大量の黒い影がこちらに向かって飛んできた。それは巨大なロイドの群れだった。さらにロイドの声につられて、ガルバンもゆっくりとこちらへ向かってくる。

「その代わり頼みがあるんだ」

「何だ…？ エサのためなら何でも我々はやるだろう」

「よし、じゃあまず。あのガルバンを足止めしなくてはいけない。お前の仲間で何とかできるか？」

「お安い御用だ…」

そうしてロイドは今度は低い声で鳴いた。それを聞いた仲間達は、自慢の俊敏性を生かして、激しい気流と共に、ガルバンより先にこちらへ到着した。キィキィと、なきわめくロイドの仲間たち。ロイドが仲間達に目配せをすると、それを見た彼らはガルバンのほうへ一斉に向かった。自分達よりも一回り大きなガルバンを数で取り囲んだ。

「じゃあ急いでアランの元へ。君が腹に口ばしを突き刺した奴の事だよ」

「よし」

そう言うと、ロイドはしなやかに気流に乗って、あっという間に地上に座っているアランの下へ降り立った。草原の草が涼やかになびく。アランは、腹に医療用の草をまかれていた。

「アランさん…やって欲しいことがあるんだ。ガルバンを倒すためには、この方法しかない」

「…ああ、お前に命令されるのは小癪だが。何だ？」

僕はアランに素早く用件を伝えると、ロイドの背中に乗っかり、彼のときかが顔に当たるのを気にしながら、また広い大空へ急浮上した。空ではガルバンがロイドの仲間を、大きなかぎ爪で捉えて、何とか包囲網を突破しようとしているところだった。ロイドの悲鳴と鮮血がほとばしる。

地上を見てアランを確認すると、鳥の背中の上で深呼吸をした。

「よし。突っ込め」

次の瞬間、ついにガルバンを外に出してしまったロイドの群れめがけて、僕とロイドは加速した。ヒュウヒュウと耳鳴りのような気流が起き、ロイドと僕は一体化したかのような感覚になった。お互いの考えている事が手に取るように分かる。

「行けえええ!!!」

ズドン、という音がしたかと思うと、ロイドの口ばしは見事ガルバンの胴に食い込んでいた。ロイドが素早く、くちばしを引き抜いたとき、何か硬いものが僕の胴体にひっかかった。ガルバンの…かぎ爪。

「:!!」

乗っていたロイドは、硬いガルバンの皮膚に当たったせい、フラフラとしながら落ちていった。仲間がすかさず背中でキャッチするも、彼は意識を失っているみたいだった。

「ギャ!ギャ!」

ガルバンは怒り狂ったような声を出して、僕の胴体を掴んだままほぼ直角に急降下していく。僕は突然の気圧の変化と視界の斜め具合に思わず意識が飛びそうになった。物凄い速さで近づく地面。そのとき、視界に見慣れた顔が現れた。

「上出来だ」

アランは地上に近づいてきたガルバンに向かって、空氣の槍を乱射した。鋭く尖った透明なそれに、ガルバンは近づいていると気付かないまま、さらに降下した。次の瞬間、空氣の槍はガルバンの胴体を貫いた。ポツカリと開いた穴からは、血は噴出さず、そのままガルバンの爪は僕を離れた。同じように落ちていく中で、僕は何かの背中にドサリと落ちた。先ほどまでクラクラして頭で、それが何かを確かめる。

「ロイド…」

僕は、一匹のロイドの背中に着地していた。周りには大勢のロイド達が、嬉しそうな顔をして僕の周りを飛んでいた。

「ふう…」

それを見た僕は、心底安心して、再び意識を手放した。

何かの毛が僕の鼻の穴に入った。くすぐったくて、顔を動かすも、思わず大きなくしゃみが出た。その反動で上半身を起こすと、僕は空を飛んでいた。飛んでいた——は正確ではない、飛んでいるロイドの背中に乗っていた。

あたりを見ると、隊員の一人一人がそれぞれロイドの背中に乗っていた。スティックは相変わらず寝ていたけど、キップ隊長やアランは、こちらを見て少し微笑んだ。僕は先頭を飛んでいて、よく見ると乗っているのは最初に出会ったロイドではないか。

「…君、無事だったんだ」

僕が首の辺りの毛を撫でると、ロイドは首を捻り、羽をバサバサと動かして、上に下にピョンピョンと跳ねるように動いた。

「…ええ、そういう貴方も…」

心地よい風が、僕の疲れた身体を撫でた。フサフサとした毛。なんだか無性に眠たかったので、そのまま首にしがみついて横になる。ロイドの群れが向かっている方向を見ると、2本の細い木が見えた。あの高さ。居住区だ。キィ、という声と共に、僕とロイドは最後の一伸び、とばかりに加速すると、雲ひとつない青い空を、突き抜けた。

「じゃあ、よろしくお願いします」

僕はムクリナ用の小さな部隊を見送りながら。彼らの頭上で付いていくロイドの群れに手を振った。先頭を行っているあのロイドが、こちらをチラリと見ると、またあの超音波のような声で鳴いた。

「…はあくやっとおわったあ…」

「疲れたな、今回の任務は…」

欠伸をしながら居住区に戻るスティックとアラン。僕は背伸びをし

て、肩を鳴らした。するとそれを見て、スティックとアランは顔を見合わせて何か考え込んだ。

「どうしたんです？」

「……決めた！ユウキ、今日はお前の歓迎パーティをする！夜になったらこの居住区の下の広場に来い。それまでは何をしようとかまわない」

スティックは、思いつきり笑うと、バブルフレッシュシャーに入っていた。それを見送ったアランはこちらを見て、少し微笑むと、

「あんまり図に乗るなよ」

と、だけ言って自らもバブルフレッシュシャーに乗った。

あいかわらず透けている外を見ながら、僕は何ともいえない感情にとらわれていた。

「……」

敵が多くて何かと疲れるけど。隊長はいい人だし、スティックとアランも徐々に心を開いてくれている。それに僕にはいろんな能力があるらしい、鳥と会話できたり、馬鹿力を出せたり。来た当初は、一刻も早く帰りたいかったが、今はここに住んでもいいと思っている。

あつという間に最上階についたバブルフレッシュシャーから降り、少し濡れた身体をブルブルと震わせて部屋の中へ入り込んだ。

葉っぱのハンモックに、パン。昨日の朝のまんまの姿の部屋が、そこにあった。シンとした部屋で、僕は置いてあった本棚から本を取ると、そのまま葉っぱのハンモックの中へ滑り込んだ。

「歓迎会……か」

僕は重たくなってくる瞼に抵抗できず、やがてまた深い眠りに落ちていった。

4チーズ目：隊長の秘密。

「…ん」

僕は何やら騒がしい音で目が覚めた。目を擦りながらハンモックから身体を起こそうとしたとき、ドアからスティックが飛び込んできた。

「あー！ やっぱりまだ寝てやがった！！ ほら、早く起きろユウキ！ 今日はお前歓迎会っていったろ？」

「そうだった！」

僕はすっかり暗くなっている外を見て、大慌てで地上へと向かった。バブルフレッシュャーの乗り方は、もう完璧にマスターした。

地上に着き、やがて穴から出ると、静かな泉の水面に炎が写っているのが見えた。と同時に、ゲラゲラとした笑い声も響いてきた。泉の周りで、今日一緒に出発した隊員達が、僕を見て手招きした。

「早く来いよユウキ！」

「そうだそうだ！ 今日の主役はお前なんだぞ！」

「えっ…！」

僕はスティックに腕を抱えられて、半ば強引にみんなの目の前に連れて行かれる。昨日キップ隊長が立っていた小高い丘の上に追いやられて、すっかり出来上がっている隊員達は楽しそうにこちらを見上げてきた。

「あ…あの。…まだ部隊に入って3日ですが、ルームメイトも、隊長も、皆さんも。とても親切で——」

「やい！ 能書きはいから飲め飲め！」

僕は自己紹介もそこそこに、押しよってきたネズミ達にもみくちゃにされながら、変な液体を飲まされた。それはどうやら人間界でいうとアルコールのようなもので、ネズミ達が言うには身体に害は全くないそう。木のコップに並々と注がれたそれはドロドロしていて真っ黒だった。

「よっしやー！久しぶりの新入りだ！今日は一晚、飲み明かそうぜ！」

スティックの掛け声と共に、キャンプファイヤーのような炎の周りで、数匹のネズミ達はダンスをし始めた。そのダンスに合わせて、どこかから葉っぱの笛のようなものや、木の太鼓のようなものが出てきて、また数匹のネズミがそれらを演奏しはじめた。

残ったネズミ達は、木の樽のようなものに溢れんばかりに入っている液体を飲みながら、木の実や魚、パンの中にチーズと少しばかりの肉が入ったような食べ物を頬張りながら、交代交代にダンスに入っていた。スティックは、不機嫌そうな隊員の手を取ると、軽い足取りでダンスに入り、飛び跳ねるようにして踊っていた。どうやら疲れはもうほとんどないらしい。その代わり、アランはグツタリと横木に座って、その様子を眺めていた。

僕は、丸太に座って、白い月を眺めているキップ隊長に近寄った。キップ隊長の毛の光沢はだいぶ治ってきていて、その輝きを取り戻すのはあとちょっとのようだ。ツンとした鼻先は、シャープな形を描いている。

「隊長。一つ質問があります」

「……なんだ？」

涼しい風が、僕とキップ隊長のひげを揺らす。激しい太鼓の音で、僕の言葉はキップ隊長以外には聴こえない。

「何故、あそこまで白ネズミを気嫌いするのですか？」

「――」

ジャリ、という土を踏みしめる音がして、キップ隊長は思い腰を上げた。そして、近くの木の陰へと僕を強引に連れて行った。

「いいか、このことは誰にも言うなよ」

「ハイ」

それを聞いて、キップ隊長は目を細めると、一呼吸した。そして全てを話し始めた。

「実は――私は、白ネズミなんだ」

思わず僕は目を見開いた。だって隊長はどこからどうみても黒い毛色……

「この黒い毛色は突然変異というもので、10年に1匹から2匹、生まれるか生まれないかの毛色だ。白ネズミは本来知能が浅く、しゃべることはできない。これは前、お前に言ったことがあるな。しかし私はしゃべれた。2本足でも立てた。だから、私は違う誰かと会話がしたかった。だからある日、同じ突然変異の親友と妹と共に村を抜け出して、どこか違うところで飛んでいくと噂のあった洞窟に入った。するとこの国に飛んできた。別空間から飛んできたから部隊に入れられたが、いろんな毛色のネズミがいる国に来て、私は本当にうれしかった——」

僕は話が理解できなかった。これまでの言葉を頭で分析しても、白ネズミをあそこまで気嫌いする理由は見つからない。するとキップ隊長の表情が怒りに変わった。

「だが！友人に白ネズミだと話せば、皆離れていった！あの奴隷ネズミのことか、ってね。私は後日、白ネズミがワゴンを轢いているのを見かけた。鞭で叩かれても反論すら出来ない！そのみじめな姿といったら……だから私は、その日以来本当に信用した部下以外には、この話はしない事に決めたんだ」

キップ隊長は最後にこちらを見て微笑んだ。

「……僕を、信用してくれたんですか」

俯いて、呟く。僕と隊長は出会って3日……そんな短期間なのに。

「……いいや。お前がこの事を嗅ぎまわるから、面倒くさくなってるだけだ。あの調子じゃ、スティックが口を開きそうだったからな」

「あ」

あの日の会話……聞こえてたのか。皮肉をこめた隊長の言葉、だけど、やっぱりうれしかった。ふと、僕は、帰ろうとするキップ隊長の後姿を見て思った。

「あの！」

「何だ…まだあるのか！」

キップ隊長はいい加減にしろ、とばかりに僕に詰め寄った。

「先ほどの会話を聞く限りですが…親友と妹さんはどちらに——」
僕が言葉を言い終わる前に、キップ隊長の目の色が一瞬黄色になった気がした。まさか、こんなところで覚醒…!!

「ユウキ…！」

キップ隊長は、僕の首根っこを掴んで宙に持ち上げた。首が絞まり、息が苦しくなる。足をジタバタと動かすも、それは無駄な抵抗だった。

「人には、聞いていいことと、悪いことがあるのを、知らないのか——…？」

「…う、す…いませ…ん」

次の瞬間には、僕はドサリと地面に落ちていた。黄色くなりかけた隊長の瞳は、やがて元の青色に戻った。僕は入ってくる空気にむせながら、居住区の入りの穴に入っていく隊長の後姿を見ていた。広場では、まだキャンプファイヤーの炎と陽気な音楽が踊っていた。隊長の中の、触れてはいけないう過去。覚醒しなければいけないほど、深く暗い傷。

それに、今日僕は触れてしまった。

やがて、僕の歓迎会は終わりを向かえ、キャンプファイヤーは泉の水で消され、すっかり出来上がっている隊員達はそれぞれ肩を貸しあいながら、自分達の部屋に戻っていった。

僕とアランも、眠ってしまったステイックを担ぎながら、最上階の自分達の部屋に戻った。

暗くなった部屋に入り、スティックをハンモックに寄せ、大きな葉っぱを被せる。アランは憎らしそうにスティックのひげを引っ張ると、自らも弦で出来たハンモックの中へ潜り込んだ。

「ユウキ、明日は何もないだろうけど、早く寝ろよ」

「うん。ありがとう」

僕はハンモックに入り、モゾモゾと身体を動かした。

先ほどの隊長の変貌ぶりが、脳裏に焼きついて離れない。

親友と、妹さん…一体、何があったんだろう

僕はしばらく悶々と考えていたが、スティックの「もう食べれない…」という寝言を聞いて、馬鹿らしくなり、そのまま葉っぱの布団を頭の上まで被り、寝た。

翌日、目が覚めると、スティックもアランもまだハンモックのい中だった。

「そういえば…今日は、戦いがないんだっけ」

特殊部隊といえど、そう毎日毎日戦いがあるわけではないらしい。

僕はハンモックから降り、思いつき背伸びをした。部屋には透明な壁を通して、朝の新鮮な空気が入ってきていた。それを思いつきり吸い込み、吐く。

「…：…何しよう」

僕はとりあえず、木のクローゼットを開き、この世界に来たときの普段着を着た。そして本棚の中をあさる。すると『居住区マップ』という薄い本が出てきた。

「…：…なんだこれ」

僕は早速その本の一ページ目を開いた。茶色の紙に書かれた見取り図のようなものは、だいぶ薄くなっていて、紙自体気をつけなければ簡単に破けてしまいそうだった。パラパラと流し読みすると、あ

る文字が目には止まった。この国に來た当初は、全く文字が読めなかったが、今ではなんとなく読める。

「資料倉庫…主な資料：特殊部隊歴代隊員のアルバム・怪物の生態」

それは三階と書いてあった。僕は昨日の事が頭をよぎった。

「あの話で行くと：隊長の親友も別空間から來たってことになるから：部隊に入ってるはずだよな」

パターンと本を閉じて、クローゼットの中にあったヘンテコなカバンにそれを突っ込むと、僕は部屋から出た。あいかわらず緑の天井は動いていて、この居住区は生きているというのを実感させられる。バブルフレッシャーはすでに日常の一部と化している。急降下してく流れ。三階で降りたことは今まで一度もない。僕は凄まじい勢いで落下していく中で、16：13：と階を数えていった。

「8階：5階：そりゃ！！」

僕は躊躇せず、そのまま勢い良く飛び降りた。すると、そこは見事に三階だった。横の部屋から出てきた隊員が、僕を見るとニッコリ笑って通り過ぎていった。

心の中では、こんなことはするべきではないと、思っているが、詮索してしまう。知らない事は知りたい。それは普通の欲求ではないのだろうか。

僕はあたりに気を配りながら、歩を進めた。やがて突き当たりになると、『資料倉庫』と、かろうじで見える古びたプレートがあった。別に立ち入り禁止とは書いてなかったもので、僕は静かに中に入った。倉庫には誰もいなかった。暗い中で、ただひたすら本棚が並んでいた。そつと足を動かしながら、奥に進んでいく。やがて、一際分厚い本が並んでいる所に來たので頭上を見上げると、木の案内に『歴代隊員資料』と書いてあった。

僕は占めた、とばかりにそれらを片っ端から見た。

「第1期生：うわ、古いな…」

この国の、年や月日のあらわし方は分からなかったが、アルバムの

隅の方に「80Y」と書いてある。

「80年前ってことか……？　だとしたら案外新しいんだなこの部隊って」

僕はキップ隊長の顔を思い浮かべた。何歳ぐらいなんだろう……？　恰幅はあるし、若くは見えないけど、そんなに年寄りにも見えない。

「だいたい20年前くらいかな……」

僕は本をさかのぼっていき、やがて「20Y」と書かれたアルバムを見つけた。急いでそれを開く。

「あっ！」

僕は、思わず叫んだ。キップ・リバーズ。写真つきだったからそれは確信に近かった。黒い毛色に優しい顔立ち。それは紛れもなくキップ隊長だった。僕はキップ隊長の横に貼ってある顔写真を見て、アルバムを落としそうになった。

「……嘘だ……！」

そこには、キップ隊長と同じように、優しい顔で微笑む、ヒルトン・モックの顔があった。

「まさか……そうだよ、偶然だよ。きっと、ヒルトンさんとキップさんが親友なわけない……」

僕は自分に言い聞かせるように呟きながら、アルバムを閉じた。

僕を迎えに来た時、ヒルトンさんとキップ隊長は、仲が悪そうだったじゃないか。僕は逃げるようにして資料倉庫から出た。

暑くもないのに汗が浮き出る。

「……」

振り返って、『資料倉庫』と書かれたプレートをもう一度見る。

もしヒルトンさんとキップ隊長が親友だとして、彼らの関係に何か重大なヒビが入る出来事があったとしたら。それは一体なんなのか……僕は、何か嫌な予感がした。何かは全くわからないのだけれども。暗く重たい、張り詰めるそれが、確実に迫っている気がした。

5チーヅ目…ネズリンピック

資料室からバブルフレッシュシャーに乘ろうと歩いていると、いきなりさきほどのネズミが飛び出してきた。そのネズミは、僕を見て満面の笑みを浮かべると、三階に響き渡る声でこう叫んだ。

「起きろー！ー！！！！ネズリンピックの開催だ！！！！！！」

ネズミはまだ寝ていた仲間が飛び起きる音がしたのを確認すると、嬉しそうにまたバブルフレッシュシャーに乗って上に上がっていった。まった。

「…ネズリンピック？」

僕はとりあえず一階へ降りた。すると中央の巨大な掲示板にネズミ達が大勢集まっていた。歓声や興奮する声が聞こえてくる。僕が啞然としていると、たくさんのネズミの間からスティックがひねり出てきた。そして彼は僕の腕を強引に掴むと、ネズミ達の中へギュウギュウと押し込んだ。僕は弾き出るようにして、掲示板に一番近い最前列に出ていた。そして目の前の案内を読んだ。

「5年の一度のネズリンピックがついに開催…」

さらに僕が最後まで読みきれないうちに、またスティックの腕がネズミの間を縫うようにして伸びてきた。また有無を言わず引っ張られ、いろんなネズミにがつがつ当たりながらも、ようやく僕は集団から脱出した。

「痛いなあ！何するんだよスティック——」

ひりひりする体を撫でながら、僕はにやついているスティックを睨んだ。

「ユウキ！俺とアランとお前でネズリンピックでるぞ！」

「はあ！？」

スティックは問答無用とばかりに僕の話を遮ると、何やらポケットからチラシを出した。そこには『ネズリンピック優勝商品一覧』と書いてある。

「草のイスに草のお風呂…草の机???…良いものないじゃないか！」

スティックはチラシを見て僕が嫌そうな顔を見ると、満足そうな笑みを浮かべて、ある一点を指指した。

「馬鹿。違う。今回狙うのはこれ、『ネズシティの歴史』っていう本だ」

「……」

僕はそろりと立ち上がるとスティックに背を向けた。

「僕、出ないからな」

力を入れる僕の肩に、スティックの手が優しく乗ったので、思わず振り向いた。するとそこには仁王立ちして不敵に笑っているスティックの姿があった。

「お前に、拒否権は、ない！」

「ハア…ハア…きつい…！」

「だな…うぐぐ…っ」

「何だ？これぐらい余裕だろ？」

新鮮な空気を欲しがる肺と、棒のようになった足と、どこまでも続くきつい坂道に、僕はその場で倒れこみたかった。横で汗だくになっているスティックの口からは、ヒュウヒュウという空気が出入りする音が聴こえる。茶色の土の上に、ポタポタと僕らの汗が落ちているのが見えた。

さらに坂を上る。ジリジリと照りつけるような暑さの中、ひたすら足を動かし続ける。全く汗をかいていなかったアランの額にも、うっすらと汗がにじみ始めた。

スティックは木陰を見つけると、目を輝かせて言った。

「アラン…そろそろ木陰入ろう…」

「そうだよ…」

「…まったく：お前ら本当に特殊部隊隊員かよ…」

それを聞いたスティックは木陰に転がり込んだ。僕は汗で体にひつついた服をパタパタとさせながら、どこかで耳覚えのある音がしているのを感じた。おもむろに木陰から顔を出す。すると、坂の上から一定のスピードで白ネズミのワゴンが降りてくるのが見えた。チュウチュウとわめきたてる鳴き声に、不規則的なムチの音。スティックも顔を出してそれを確認した。

「なんだあ？また新入りか？」

「さあ…」

白ネズミのワゴンはやがて僕らの前に止まると、キップ隊長が顔を出した。

「ここを何をしているお前ら？」

スティックとアランは脱力していた体をキチンと整え、いつものように素早く敬礼した。

「ネズリンピックへ向けての、練習であります！」

「ほう…：まあいい。頑張ってくれよ」

僕は会話する隊長と二匹を差し置いて、隊長の隣に座っているネズミを見ようと覗き込んだ。すると僕は驚いた。なんとそのネズミの目は左と右で色が違った。左は薄い緑で、右は燃えるような赤色。さらに薄い水色の毛は、ゆるやかにエーブしている。あきらかに、かっこいいと言われる部類だ。

隊長が、僕が覗き込んでいるのに気が付くとそのネズミの紹介を始めた。

「ああ、こいつはジェニー・シェパードと言って、今日から特殊部隊に入る。部屋はお前らと同じ予定だから、よろしく頼むな」

「ハイ！」

スティックとアランは、敬礼した。やがて白ワゴンはカラカラという音を立てながらまた一定のスピードで去っていった。僕はその後姿を、ワゴンが見えなくなるまで見つめていた。

結局あの後、僕らは夜まで練習に明け暮れた。そして疲れの溜まった体をひきずりながら、居住区のバブルフレッシャーに乗りなるとか疲れを取る。部屋に戻ると、そこには銀の大きな剣を磨いているジェニーの姿があった。彼はそのオッドアイ（左右で色が違う目のこと）に僕らを映すと、自らの見の丈ほどもある銀の刃を納めた。

「ジェニー・ショパードです、今日からこの部屋で生活させていただきます。今まで経験してきた部隊は…多いのでいいません」

スティックはずっこけるような仕草をするとジェニーに手を差し出した。

「よろしく。俺はスティック。こっちはアラン。んでそのちっこののがユウキ」

スティックはジェニーと握手を交わすと、交流を深めるために食堂に行かないかと僕たちに言った。ジェニーはその申し出を渋々承諾すると、手馴れた感じでバブルフレッシャーに乗り食堂へ向かった。僕はバブルフレッシャーの中で、隣の凜としたネズミに聞いてみた。

「その…ジェニーさん？」

「ジェニーでいいさ」

隣の青い毛はゆるりと微笑んだ。

「君は、どうやってこの部隊に？」

「ああ、俺は元々この国出身だよ。ただし、子供るときから親父に戦いの作法を叩きこまれた」

「所謂、エリートって奴だな」

横で聞いていたアランが付け足した。

スティックは、しばらく何かを考え込んでいたが、一階でバブルフレッシャーを降りるとようやく思い出したように指を立てた。

「そうだ！ジェニーも俺達と一緒にネズリンピックに出ようぜ！」

思わず、僕とアランはスティックのしっぽを踏みつけた。そしてアランはスティックの首に腕を巻きつけるようにして囁いた。

「スティック…？ネズリンピックは三ネズミ一組なのを知ってる

のよなあ…？ジェニーを入れたらどうなるかぐらい…お前のその小さな脳みそでも分かるはずだよなあ…？！」

「だから…っあれ見ろって…！！！」

ステイックは苦しそうにまた人の集まっている掲示板を指差した。仕方がなく、僕とアランは茶色のネズミの指差した方向へ歩いていた。そこには小さな紙が貼ってあった。

「えーと…参加事項変更のお知らせ？後日行われるネズリンピックは2ネズミ一組に決定いたしました。……………」

僕とアランがゆっくり振り返ると、そこには怒りで体を振るわせるフティックと、何が起きたのかわかっていない様子のジェニーがいた。僕たちは、その場の沈黙に耐えられず、苦笑いしながら食堂へ入っていった。

食堂でたらふく夜ご飯を食べた後、僕たち4人(?)は部屋に戻り、朝食の残りであった黄色と白の野菜の根っこで、ペアを決めた。念入りに野菜をかきませるステイックとアラン。どうせ4本しかないのだから、あんまり関係ない気がするけど…。次の瞬間、ステイックが勢いよく根っこを引っ張った。根の色は、白。続いてアランも引っ張る。白。

「つくづく…腐れ縁だよなあ俺達って。アラン」

「……………ステイック……………」

自動的に僕とジェニーということになる。ジェニーは僕を見ると、手をさしだした。僕は微笑んで、差し出された手を握った。

「よろしく！ジェニー」

「ああ、こちらこそ」

僕たち二人はなんとなく相性がいいうだ。それを見たアランとス

ティックは、2人とも暗い顔をしてハンモックにもぐりこんでしまった。何か落ち込む度に頭まで葉っぱの布団をかけるのは、彼らの癖だろうか。その証拠に、ハンモックから垂れ下がった2本のしっぽが、不規則に揺れている。

「…俺も、寝るよ。おやすみユウキ」

「おやすみ」

ジェニーはそういつて重そうな鎧をはずし、布の生地で出来た服だけになると、気品漂う仕草で、ハンモックが足りない、急遽作られた柔らかそうな葉っぱの布団に横たわった。

僕も急いでハンモックに入る。この部隊に入って10日。今日また仲間が増えた。

そして、ネズリンピックまで10日。いや、この世界で言うと、プラス10Y…かな。

それから10日間、鬼のような練習はジェニーを含めて続いた。

日が昇ると、すぐに僕たちは居住区から出て、町のメインストリートを軽くジョギング。そしてボコボコとした裏道に入り、長い坂道を登る。そして上りきった所にある開けた場所で腹筋100回にスクワットのようなもの70回。うさぎとび100回。ect…

最初ジェニーは、「こんなことをしていて戦いや戦争、犯罪は起きたらどうするのか？」

と、聞いてきた。僕は、犯罪、と聞いて彼の質問に答えず、質問しかえした。

「犯罪って何？」

すると彼は驚いた顔をして、少し考えていった。

「そうか、話してなかったかな？俺は元・警察の直属部隊に所属していたんだ」

「警察!？」

それを聞いて、しばらく忘れていたヒルトンさんのことを思い出した。警察にも、直属の部隊があったんだ……ということは、この国には部隊が二つあるのか？

「そういうことだよ」

「え？」

心中で呟いたつもりが、どうやら口に出していたみたいだ。

「特殊部隊は、主に遠くまで遠征してくれる。どんなことでも引き受ける、万能屋って感じ、それに引き換え、我々は近くの町や村の治安を守る。犯罪者を取り締まる係りってところかな？」

「なるほど……」

僕は頷いた。この国の仕組みが、だいぶ分かってきた。

そんなこんなで、あっという間に10日間は過ぎていった。

そして、遂にネズリンピック開催の日。ネズリンピックのスタート地点は、居住区のすぐ目の前にある広い道だった。色とりどりの風船と文字で飾られ、道の脇には観客が溢れかえった。歓声と、興奮の声が、町に充満する。5年に一度だもんな。

「すごい人のかず……」

「ああ……俺もネズリンピックは初めてだ」

周りで準備運動をする参加者達は、余裕の顔つきだった。参加者はざっと500人ぐらいだろうか。二人一組だから……250組ってところか。広い道は後ろの方までネズミ達で埋め尽くされている。僕とジェニーはお互い手錠を嵌められて、離れる事はできなくなった。

「それでは、皆さん準備はよいですかー！？」

木の台の上で、大きな巻貝を口に当てているネズミが、大声で叫ぶと、観客の声がさらにヒートアップした。耳に突き刺さるような大歓声。

「……」

少し、緊張した。

次の瞬間、ブォーンという低い音と共に一斉に参加者達がスタートを切った。周りは経験者ばかりらしく、皆様子を探り合っている。僕は昨日ステイックに言われた作戦を思い出し出していた。

『いいか？ネズリンピックは耐久レースだ。それも参加者の半分は脱落するという半端じゃなく厳しいもんだ。だから最初はスロ―ペースで行け』

「…ジェニー、スロ―ペースで行こう」

「分かってる」

僕らはリズムよく地面を蹴りだしながら、白い大地を軽快に駆け抜けていった。「どれくらいの距離なんだろうな？」

「さあ…：半分为脱落する訳だろ？そしたら、距離よりも過酷さじゃないかな？あ、ほら。早速何か見えてきた」

ジェニーが指差す方向。そこには一枚の看板が立っていた。道が二手に分かれている。前を走っていたステイックとアランは、右へ曲がっていった。急いで看板に近づいて、読む。

「貴方のなかで一番大事なものはどっち…？何だこれ！」

「…左の道…お金…：右の道…友情」

僕とジェニーは顔を見合わせた。まさかネズリンピックがクイズ方式だったとは…：しかし悩んでいる間にも他の参加者は続々と道を選んで走っていく。

「このままじゃ出遅れる！ジェニー！君はどっち？」

「…俺は左だ」

「…！！」

ジェニーは、少し苦そうな顔をしていたが、その目に迷いはなかった。僕。僕は…？

「――僕は右だ」

「…だろうな」

意外なジェニーの返答に、少し拍子が抜けた。もっと反論されるか
と置いていたのに。

「いいさ、右へ行こう。スティックとアランも右だった」

「……いいのかい？」

急いで右へ行こうとするジェニーに、僕が伺うように問うと、彼は
眉間を寄せて僕の肩を掴んだ。服がグシャ、と潰れる。

「人に聞くようなものじゃないだろう？自分の思ったとおりに行
けばいいんだよ！」

「……うん」

ジェニーのオッドアイが光ったかと思うと、彼はすぐに肩を掴んで
いた手を離れた。

「すまない、ユウキ」

「いいんだ」

謝ってくる必要なんてないんだけどな。僕らはすぐさま『右の道』
へ入った。

後ろの木の陰から、監視しているネズミがいるとは思わずに……

『さあ…右に行った方の、最初の第一関門は……灼熱の熱砂に住む
と言われる化け物ターチャー！』

「な…なんだここ」

「…まるで巨大なアリ地獄だな…」

僕らはどこまでも続く砂の大地に、ところどころ穴が開いているのに気付いた。急いで走る参加者が近くを通ると、いきなり何かの毛の生えた足によって捕らえられ、そのまま穴の中に、ひきずられていく。その後は悲鳴しか聴こえない。

「ひい…！」

「…なんだありゃ」

僕とジェニーはしばらく突っ立っていたが、その中でも毛足の攻撃をなんとかいかくぐって先へ進んでいく参加者も見えた。スティックはお尻を毛足で引っかかれながらも、アランとの協力でなんとか抜けたようだ。

「よし！僕らも行こうジェニー！」

「ああ！」

いきり立って、猛スピードで白い熱砂を一直線に走っていく。今までは硬かった足場は思ったりも悪く、なかなか抜けない。そのまましていると沈んで行きそうなほどだ。しばらく走って、周りは毛足の住んでいると思われる巣穴が多くなってきた。まさにアリ地獄状態だ…

「く…なんだよ。もう！」

僕はまとわりつくように抜けない砂にいらだった。

「慌てるな…なるべくつま先だけで走れ。そうすれば抜ける」

「…ほんとうだ！すごいよジェニー！」

ジェニーは少し照れくさそうに笑った。すると、また足が抜けない。苛立って、足元をみると、毛の生えた黒い足の爪が巻きついていていた。

「…！！！！！！」

「ターチャーー！」

ジェニーは腰につけていた剣を抜き取り、毛足をぶったぎった。先っぽがなくなった毛足は、スルスルと穴の中に戻っていった。

「ああ…なんだ、案外弱いじゃないか！」

「………いいや……」

僕が安心してジェニーに話しかけると、ジェニーの顔は引きつっていた。さてよ…このパターンはどこかで…！！晴れているはずなのに辺りに黒い影ができています。

僕はゆっくりと振り返った。

そこには、全身に黒い毛がびっしりと生えた、口の両側にはとがったカマのようなものがついている化け物がいた。口からは、白い涎が垂れている。…先ほどの手は、コイツのものか！

「ギギ…キィィ！」

「ぬわっ」

いきなり降ってきた頭を咄嗟によけようと飛ぶと、バチン！という音とともに腕がつった。そのままバランスを崩して、地面に落ちる。

「いきなり飛ぶなよユウキ！」

「ご。ごめん！」

そうだった。今僕とジェニーはお互い手錠で繋がれている。呼吸を合わせないと…

「キィ！キィィ！」

これでもか、というほどバクバク食いついてくるターチャー。避けきれずに、少し体をかじられた。足から血がツウと垂れる。それを見て、ターチャーは興奮したように鳴いた。僕は痺れを切らした。こんな奴…ガルバンやモルラットに比べたら、なんでもないのに！

「さつきから…」

振り下ろしてきた頭に飛び乗る。ジェニーはもう引きずるような感じだ。砂まみれになり、ジェニーはあっぷあっぷしながら「いい加減にしろユウキ！」と叫んでいる。

僕はそれを聞かず、ターチャーの頭にかかと落とすを食らわせた。僕のかかとは硬い皮膚が思いつきりのめり込む。

「キィキィキィキィと……」

ひるんだターチャーを見ると、そのままジェニーを引きずりながら、地面に飛び降り、今度はターチャーの頭部の横から二段飛び膝蹴りを入れる。風圧で切れたターチャーの皮膚から吹き出る液体が、僕

の体に付着する。ぐらつくターチャー。意外にしぶとい。

「うるさいんだよ!!!」

最後に僕はターチャーの足を持って、コマのように思い切り振り回した。巨体が回るせいで、周りの熱砂が吹き荒れる。そうして僕は勢いのついたターチャーの体をそのまま巣穴に投げ入れた。地面が摺れるような地響きが起き、巣穴を覗きこむと、ターチャーは目を回したのか気絶したみたいだ。そして、そのままズブズブと巣穴の砂に沈んでいった。

「……まったく!」

僕はパンパンと手を叩いて、ついた涎や砂を落とした。すると、ふと腕に違和感がないのを感じた。見ると、手錠が切れている。そしてジェニーがいない。

「あれ!? ジェニー?」

急いで辺りを見回すと、白い砂ぼこりの中で、何か動くものが見えた。それはムクリと起き上がると、ケホンと咳をして、体についた白い砂をパンパンと払った。

「ジェ…ジェニー…」

そう、白い砂の中から、彼の柔らかそうな青い毛が現れた。赤と緑のオッドアイが怒りに燃えて光っている。まさか、と思ったが、腰から剣を取り出すと、ジェニーは怒りに震える表情で呟いた。

「絶対…殺す!」

「うわああ!」

僕はジェニーの剣から逃げるために、走りに走った。そりやもう、ターチャーなんて目じゃないぐらいに。

『ターチャーの巣穴！参加者達はなかなか苦戦しています！現在確認した限りでは、リタイア5組。ターチャーにやられたと見れる参加者15組！そのほかはまだ未確認です！第一関門から熱い戦いが繰り広げられています！』

その頃、人気のなくなった町で――

「……ただいま戻りました！」

男は舌打ちをしながら警察署に走りこんできたネズミを出迎えた。

「遅いじゃないか……！」

「……すいません。報告ですが、先ほど最後の235組目、右に入りました！これまでの統計は左が20組右が215組です脱落者は15組です！」

「りょーかい……つくづく甘い奴らが多いよなあこの国は――面白いわ」

「……そうですね」

「そのまま監視を続けろ！左に行った奴らは全員、この大会が終わった後は警察部隊に入れるように手配するんだぞ……ボスの命令だ」

「了解」

敬礼をしてネズミが再び警察署から飛び出していくのを見届けると、休憩室で休んでいた灰色ネズミはカップにそつと液体を注いだ。コポコポ……という音と共に、カップの中が満杯になる。

「……………」

それを静かにすすると、ネズミは開け放たれた窓から見える青い空を見上げた。

「……第一関門、ターチャーの巣穴……脱落者30人……と。次は50人くらいかなあ……」

ネズミは茶色の紙に……黒い棒で記録を書きとめた。

「優勝するのは誰か——楽しみだね…」
そういつて、ネズミはまたカップに手を伸ばした。

6 チーズ目…ネズリンピックの終焉

「と、とにかく！手錠がなくなったから楽になったな！」

「…ったく」

ジェニーはどうかやら許してくれたようで、自慢の剣を納めてくれた。熱砂のターチャー地獄を抜けて、道を進むと、また2本目の掲示板が置いてあった。何やら激しい水の音がする。目の前には長い2本の橋が架かっている。切り立った崖のような場所に、縄で結ったような釣り橋だ。

「次はなんだ？」

「……度胸試し…左か右か…どちらかは川にドボン！落ちると何が起こるかわかりません…だってさ」

「度胸試し…か」

僕は崖を覗き込んだ。すると下は案の定川が流れていた。流れは早そうで、落ちたらどうなるか……

「簡単な話だな」

「え？」

ジェニーは、素早く木の陰に入った。僕も来いと手招きする。一応僕も影に隠れる。

「誰かが通るまで待てばいいんだよ。落ちたら違う橋。落ちなかったらそっちの橋」

「…なんか、卑怯じゃないか？その方法…」

「卑怯も何もないよ。勝たなきゃ意味はないんだ」

「……うーん」

そんなこんなで息を潜めていると、案外すぐにも後ろから違う参加者が来た。

「ほらな…」

「………」

その参加者は、いろいろ考えるのが苦手なタイプらしく、近くに落

ちていた小枝で行く方向を決めた。指で枝を立てて、そのまま転がす。すると枝は右を示した。僕とジェニーは息を潜めて見守る。

すると、彼らは橋の中盤まで行った所で急に消えた。不自然なほど——急に。

「!?!?…え、今の、落ちた…?」

「そうみたいだな」

ジェニーは涼しい顔をして草むらから出ると、左に道を指差した。

「それじゃ、こっちに行けば安全だ」

「……」

ジェニーと僕は、左の橋にのついた。橋はなんとも頼りがいがなく、歩くたびにギシギシ揺れる。下を見ると、濁流のように水が流れている。先ほど落ちた二人は、もう見えない。

「…ほんとに…こっちで…いいのかな」

「当たり前だろ…あっちが落ちるんだから」

僕とジェニーは、細心の注意を払いつつ歩を進めた。先ほどの参加者が消えた場所に近くなる。先頭に行くジェニーは、確かめるように足をトントン、と揺らした。

すると、僕は急に重力を感じなくなった。

「は…!?!?」

「馬鹿な——!」

足元の縄はパツカリと開き、僕たち二人は急降下した。水の気配が一気に近づいた、と思ったら、ドボーンという音と共に、視界は白い泡だらけになった。慌てて水面に浮上して、ジェニーを探す。すると彼も無事だった。しかし激しい水流でどんどん流されていく。

「くそ…:…騙された!」

僕たち二人は散々叫んで、叫びつかれたので、なんとか岸に上がろうと試みた。

近くの岩場に必死にしがみつく。すると、流れが少し穏やかになった。

「…はあ」

「…それにしても、ヒドイな。ネズリンピックの主催者は」

「ああ、あれじゃあどちらを選んでも落ちるってことじゃないか！」

「……」

僕はふと、掲示板の文字を思い出した。

「そういえば…落ちると何が起こるかわかりませんって…」

「…初めから落ちるように仕組んでたくせにな…」

まだそれを根に持っているジェニー。僕はそんな様子に笑いながら、水の中で何かの気配を感じた。その証拠に、何かが呼吸している時に出る、気泡が水面にたくさん現れている。

「…またか」

次の瞬間、穏やかだった水流が急に激しくなった。

「むぐっ！」

顔に容赦なく当たる水しぶき。体ごと押し流すような、激しい圧力。

水中の流れが、一層強くなった。何かに激しく引っ張られるような強さだ。

僕はぬるぬるした岩にしがみつくのにがむしゃらになった。ジェニーは、冷静に水中にいるのが何かを見極めようとしている。すると、僕の持っていた岩場が突然、バキンと言ってわれた。

「なっ…！」

そのまま僕は流された。

「ユウキ…！」

かき混ぜるような水流の向こうで、ジェニーも僕を追っかけるように岩から手を話すのが見えた。

「う…ん」

「起きろ、こら、起きろ！」

ペシペシと、頬を叩かれて目を覚ます。するとそこは空が吹き抜けていて、ドーム状になった洞窟のような場所だった。水流から打ち上げられるように、僕とジェニーは洞窟の真ん中で倒れていた。すっかりびしょ濡れの体を起こして、周りを見る。

すり鉢上になった崖からはチビチビ草が生えていたり、吹き抜けの空からは太陽の光が差しこんで、眩しいほどだ。ただし、目の前には巨大な巣穴のようなものがある。まさか、またか？

着ていた服はあつというまに乾いてしまった。

「：道にどうやって戻るんだろう？」

「さあ？」

ジェニーは首を傾げると何かを発見した。

「また掲示板だ：」

「なになに……」

『脱落した諸君にチャンスを上げよう：第二関門・水を操りし古代の水竜と戦い、見事勝利したら、最後の第三関門への近道となる道へのヒントをもらえるだろう——幸運を祈る！』

僕とジェニーが、湧き出てくる怒りをあらわにしたとき、突然また体がびしょ濡れになった。どうやら巣穴から水が飛んできたらしい。

「：水竜」

振り向くと、そこには透き通るような水色のような体の、美しい竜が居た。額から生えた長い角に、長く突き出た鼻。水で濡れる口に綺麗に並んだ牙。そして小さな手と太い足。極めつけは洞窟内いっぱいに広がるほどの、大きな翼。全身は常に水が滴っている。

「いっちょやるか」

「おう」

僕はグルグルと腕を回し、ジェニーはガギン、という音と共に銀色の剣を取り出した。

「シュウウウ：」

水竜は、僕らを見定めるように見つめると、口を大きく開いた。僕

がその中を見ようとした瞬間、水圧で吹っ飛ばされた。張り出した岩の壁に叩きつけられ、体が軋む。一瞬、息が止まった。

「っ…こいつ！」

「待てよ、こいつは俺がやる」

「ジェニー…」

そういうと、ジェニーは剣を水竜に構えた。磨き上げられた銀の刀身に、自らの赤い瞳が写る。

水竜が巨大な羽をばたつかせると、すり鉢上の洞窟内には渦を巻く気流のようなものが起こった。ジェニーの青い毛が揺れる。

「…」

次の瞬間、その気流に乗って大量の水でできた鋭い槍が飛んできた。ジェニーはそれらを剣で裁きながら、円を描くようにして竜の懷へ接近していく。さらに竜はその気流と槍に激しい水流を混ぜ、白い泡のようなものも高速で吐いた。ジェニーは一気に水に飲み込まれ、見えなくなった。竜の作り出す気流はさらに激しくなり、バサバサと羽を動かす。水も濁流と化し、あやうく僕も流されそうになる。

「ジェニー！！」

全く見えなくなった。水竜も、ジェニーも。

あるのは、渦のような水流と、気流だけだ。

僕は息を飲んだ。渦を巻いている水流の中心から、何か違う液体が流れ始めたのだ。大量の、赤い——液体。

「血…！」

慌てて僕は水流の中へ突っ込んだ。激しい流れに身を任せて、そのままグルグルと中心へ近づく。徐々に、視界に赤い液体が流れ始める。水中での息苦しさ、目を細めながら、さらに突き進む。

「…！」

赤い液体だらけになった中心。そこには水竜の喉元に剣を突き刺しているジェニーの姿があった。しかし、ジェニーは気を失っている。どうやら溺れたみたいだ。

僕は急いでジェニーを引っ張る。なかなか剣が抜けない。渾身の力をこめて、ジェニーの剣を掴んでいる指を離させて、再び引っ張ると、スポンと抜け、そのまま水流の壁から抜け出す。

「げほっげほ…」

水を少し吸い込んでしまい、僕はむせた。まだ呼吸をしないジェニーに、人間界にいたときに、保健でならった心臓マッサージをほどこす。

「くっそ…起きろよジェニー！」

必死で心臓を押す。すると、ジェニーの口から大量の水が噴出し、ジェニーは呼吸を始めた。ハアハアと、息苦しそうながらも、うつすらとジェニーは目を開けた。

「…う…」

「起きたか…良かった…」

ジェニーは、ムクリと起き上がると、倒れている水竜と、喉元に刺さっている自分の剣を見た。

「やったのか、俺」

「ああ！すごいよジェニー！」

僕は水流もなくなったので、竜に近寄ると、喉の剣を力一杯引っ張って抜いた。剣には竜の血がベツタリとついている。

「やっぱり…嫌だよな」

僕が差し出した剣を、彼は受け取り、すぐに血をふき取った。

「何言ってるんだよ…やらないきゃ、お前がやられてた」

「そうだけど…」

ジェニーはすっかり綺麗になった剣を支えにして立ち上がると、もう一度水竜を見つめて呟いた。

「やっぱり、無駄な殺しは嫌いだよ俺は——仕方ないとか、そんなに済ませちゃいけないんだ……」

ジェニーは水竜に黙祷を捧げると、剣を納めた。そして黙っている俺の方を見て、微笑むと竜の巣穴を指差した。

「多分ここが第三関門への近道だ！行こうぜ相棒！」

「……うん！」

僕たちは再び暗い穴の中を走り出した。

「…あ、光が見えてきた！」

「…本当だ」

僕とジェニーは暗い水竜の巣穴をしばらく走っていたが、やがてかすかな光が見えてきた。急いで出口に駆け寄り、勢い良く飛び出すと、目がくらむような光が一気に差し込んできた。さらにその後が続くように、ワァツという大きな歓声が降ってきた。思わず、つぶっていた目を開けると、円状の深くぼ地のような場所で、大勢の観客が何かに声援を送る姿があった。巣穴は、くぼ地の近くに立てられた葉っぱと枝で組まれたエントリー会場に繋がっていた。

「……なんだ、ここ？」

「おい、あれ見ろユウキ！」

ジェニーが指差す先には、スティックとアランが腕から流れだす血を押さえて、地面に倒れこんでいる。さらに視線を滑らせると、巨大な何かがいた。それを表す形容詞で：一番近いものは、人間界にいたときに、いつか図鑑で見たTーレックス：そう、ティラノサウルスだ。あいつをほぼ四足歩行にして、緑の体色をどす黒くして、首をもうすこし太く、力強くしたような…生物。

「……つまり、あれか」

僕がジェニーに話しかけようとする、彼はさっさとエントリーを済ませていた。

「ユウキ。リタイヤするときは手を体の前で交差しろってよ、バツテン作ればいいんだ。それで、ルールは、あの変な化け物を倒せばいいだけらしい。今までと変わらないな」

「……倒すだけ…ね」

今にも戦いたい、とばかりに檻への入り口へと僕を引っ張っていくジェニー。どこからそんな戦闘意欲が…僕はスティックとアランを

今にも食い殺しそうな化け物を見て、顔を引きつらせるしかなかった。やがてぶちと茶色のネズミは、泣きそうな顔で、体の前でバツを作った。

『さあネズリンピックも最後の関門になりました！最後は新種のは虫類として最近見つかった最強・最悪の生物！ディノシュレッダー！さあ参加者の中でこの関門を突破した人はまだいません！優勝商品は誰の手に…！』

「すまん！ユウキ：お前らに託す！」

「俺からも謝る。すまなかった。…あの化け物は絶対ヤバイ！」
頭を地面に擦りつけながら、血だらけになって必死で謝るステイクとアランをなだめながら、僕とジェニーはくぼ地に飛びはいる。僕らが入るとすぐに外からは好奇と心配の歓声が飛ぶ。先ほどのように、ジェニーは剣をかまえ、僕も体に力を入れた。すると、地面が揺れるようにして奴が現れた。奴が歩くたびに反動でかすかに体が浮く。足りないほどの巨大な牙と体。あの爪に当たったら最後、天国にいくしかないな。

「でかい…」

「…こりゃあ、骨が折れそうだね」

ジェニーは嬉しそうにクック、と笑うと指を何度か折り曲げて、化け物を挑発した。

とたん、化け物はその巨体ではありえないほどの速さでジェニーを吹っ飛ばすと、壁にぶち当たって地面に落下する寸前の体をもう一

度太い尾で殴った。ジェニーは近くの岩に衝突して早くも失神寸前。

「馬鹿野郎……!!」

僕はあっけなくやられたジェニーを見て、覚悟を決めた。青色ネズミを見下ろして舌なめずりする怪物のしっぽをツンツン、と触る。

「ググググ……」

腹の底から出すような、うなり声。目は血走って、完全にいかれている。牙なんて、何匹ノネズミを殺したのか、血の色が染み付いている。

「——スティックとアランでも倒せないわけだ」

僕は突進してきた奴を間一髪で避け、その体に飛び乗る。そして今まで何度も巨体を倒してきた自慢の拳で、力の限り思いっきり、奴の体を殴った。ゴッイン! という音がして、気が付くと、自分の手が腫れていた。

「ぐああああ!」

化け物の背中で転げまわる。化け物はその拍子に僕を振り落とした。地面に叩きつけられる。

「ぐっ……なんつつう硬さ……拳がダメなら足だよな」

僕はそう言うのとグンと地面を蹴った。化け物でも反応できないほどのスピードで懐に入りこむと、奴の顎をこれまでにないほどの力で蹴り上げた。メキ、という鈍い音がして、ディノシュレッダーの頭が上にひん曲がった。

「ギャオオオオオ!」

「やった!」

僕は勢いに乗ってさらにもう一発蹴り上げ、近くにあったとがった石もディノシュレッダーの頭に突き刺した。さらに先ほどの恨み、とばかりに殴りまくる。やがて血が噴出するディノシュレッダーから、急いで間合いを取ろうと地面に着地した瞬間。体に痛みが走った。

よく見ると、ふとももが深々と切れている。ディノシュレッダーの体中には、鋭い角があったのだ。腕も、胴も、みな、傷が出来てい

る。

「……！」

ボタボタと、血が地面に落ちて、僕は痛みで倒れこんだ。それを見て、同じくフラフラしているディノシュレッダーは、その巨大な爪を僕の頭にかけた。血で染まる目をギラギラさせながら、そしてえぐろうと爪を食い込ませた。その瞬間、悲痛な雄たけびが闘技場全体にわたった。頭の上にあった爪はズルリと落ちた。僕は朦朧とした目で見上げると、そこにはディノシュレッダーの頭に剣を突き刺すジェニーの姿があった。

「……勝った……」

僕らは、一番早くディノシュレッダーを倒したということで見事優勝した。

「では優勝商品をお選びください！」

「えっと……」

「その本を！」

頭に包帯を巻かれた僕より先に、スティックが本を指名してしまった。ジェニーは仕方がない、という風にため息をついた。

観客は全てスタンディングオベーション（立って拍手を送ってくれる）で、僕とジェニーは警察署長から直々に優勝商品（ただの本）と賞状と木のメダルを頂いた。

署長のクレイヴ・ドルマンさんが、にこやかに敬礼をして、僕に「君ほどの能力者は特殊部隊にはもったいない。私の部隊に入らないかい？」と悪戯っぽく言った。

僕はしばらく考えたあと、同じくにこやかに敬礼をして、「申し訳ありませんが、僕は特殊部隊です！」と言った。

それを聞いた署長は、無言で頷くと、僕とジェニーと握手を交わした。その後は、観客も参加者もみんなで飲み明かした。結局ネズリ

ンピックは、参加者250組。完走者50組（そのうち商品をもたらえたのは上位10組のみ）リタイヤ100組。死没者100組。ということになった。参加者のうち100組が死んだという事実を聞いて、僕は驚いたが、主催者の警察側は別になんとも思っていないようだ。僕は何か気になったが、次々と持ってこられる豪華な食事に気を取られ、そのまま夜は更けていった。すっかり暗くなり、僕たち4人は、クレイヴさん直々の命令で、白ネズミのワゴンに乗せてもらって居住区に帰った。疲れきった体を、バブルフレッシュャーに何度も乗って、全員で長い長い疲れを取った。相変わらずの、気持ちの良いゆりかごに乗っているような感覚に、僕はそれからの記憶はあまり覚えていない。

——こうして5年に一度のネズリンピックは華々しく終わった。

「ボス。何か素質のありそうな奴見つかりましたか？」

「……そうだな。……優勝した奴で……青色じゃないほう。あいつは鍛えればものになる」

漆黒という言葉がふさわしい毛色のネズミを、灰色の毛色ネズミが笑顔で出迎える。

「ユウキのことですか？」

「そうだ、何だお前、知り合いか？」

「……いいえ、部下が言っていたので」

灰色のネズミは、2つのカップに黒い液体を注ぎながら、忍ぶように笑った。

パイプイスに座った漆黒のネズミは、その黄色い瞳をギラつかせながら、懷から葉っぱの茎を取り出して啜えりと、唸るように言った。

「それにしても：開発段階のディノシユレイダーがやられるとは……」

「どうなさいます？」

パイプイスを揺らして、深い暗闇が広がる窓を見上げながら黒いネズミは、茎をグチリと噛みつぶし、ゆるやかにカップを持ち上げると鼻で嘲笑した。

「まあいいさ、所詮はただの隊員にすぎない」

「ハイ」

2匹のネズミは、やがて闇に溶けていった。

7 チーズ目…裏切り

「うがっ！」

僕は頭を何かで蹴られる衝撃で起きた。鼻に乗っているそれを掴んでどけながら、体を起こす。重たい瞼を擦りながら確認すると、それはスティックの足だった。思わず嫌悪感で足を投げ落とす。スティックは寝相が悪いのか、毎日毎日信じられないところまで転がってきている。

「ったく…」

僕がハンモックから飛び降りると、何かの上に着地した。視線を落とすと、それはネズリンピックで獲得した本だった。慌ててほんの上から降り、息を吹きかける。

「……」

表紙を眺めると、それはモルラットの皮でできていた。堅くて、重厚な趣のある本だ。しかも簡単には開かないようにカギまでついている。僕は少し考えた後、床に投げてあったスティックのズボンのポケットをまさぐった。すると案の定、そこから細長い銀のカギが出てきた。思わずニヤリとして、それを鍵穴に差込、ゆっくりと回す。カチン、という軽快な音がして、僕は本を開いた。

「地形…？」

一ページ目は、ネズシティの地形だった。よくわからない。さらにページをめくるも、そこには川だとか…町の分布図だとか…あまり価値のあるものは見えない情報ばかり。

「…なんでスティックはこんな本を、あんなにもほしがったんだろう…」

僕はさらにページを進める。すると、一際目を引く題があった。

「ネズシティの…伝説？」

そこには、ネズシティの古くから伝わる伝説が載っていた。

『ネズシテイには、古くから空間と空間を繋ぐ役割を持つ洞窟があると言われている。しかし洞窟の内部は、恐ろしいまでに深く入り組んでいて、過去にこの洞窟に入った探険家たちは、誰一人として帰ってきたものはいない…さらに洞窟の最も奥には、この世にある唯一無二の宝も眠っているとされている…』

ここで僕はキップ隊長の言葉を思い出した。

「空間を超える洞窟から飛んできたって言ってた…じゃあキップ隊長が飛んできた洞窟も、この洞窟の一部…ということか…？」

「キップ隊長がどうしたんです？」

背後から突然聞こえた声に、僕は飛び上がるようにして驚いた。振り返ると、そこにはヒルトンさんがいた。

「おや？その本は…？」

不意にヒルトンさんは僕が抱えている本を見て、表情を変えた。そして本に手をかけると、

「…ユウキくん。その本、見せてくださいよ」

と、笑って言った。

僕は急いで本を後ろ手に持った。手を弾かれたヒルトンさんは、いたって冷静な顔をした。

「いやです！」

「…なぜ？」

「そもそも、なんでヒルトンさんがここにいるんです!？」

僕は、自分でも驚くほど大きな声を出していた。ハッとして口を押さえる。

すると、部屋の気配に気づいたのか、ジェニーが起きてきた。

「どうしたんだ…ユウキ…って…」

「や、やあジェニー…」

ジェニーは葉っぱのベッドから飛び降りて、ヒルトンさんに握手を求めた。するとアランとスティックも起きてきた。アランは目をこすりながら状況を確認すると、飛び起きた。

そういえばジェニーは元・警察部隊。それならヒルトンさんと知り合いでも不思議じゃない。寝ぼけ眼のステイックは、ようやくヒルトンさんを認識すると、ゆるゆるとハンモックから降りた。そして僕のほうへ歩んできて、小さな声で囁いた。

「あの制服：警察だろ？何でこんなところにいるんだ？」

僕はそれを聞いて、あてつけるようにヒルトンさんに尋ねた。

「何か用ですかヒルトンさん？」

ジェニーはいつものように鎧を纏って、剣を腰に携えると、カシヤカシヤと剣の具合をチェックしていた。

「ああ、：今日はある人と話がしたくて――」

ヒルトンさんは、僕のほうをチラリと見た。なぜか、本を持つ手が汗ばむ。

「久しぶりに、キップ隊長に会いたくなりましてね……」

「そうでしたか、では俺が案内します」

ジェニーは最後に赤いマントのようなものを肩に取り付けると、颯爽とヒルトンさんをドアまで招くと、僕たち三匹に目配せして出て行った。

僕はカシヤカシヤというジェニーの鎧の擦れる音が聞こえなくなるまで様子を伺っていたが、やがて何も聞こえなくなったので、息を大きく吐き出した。一気に体が脱力する。

「……ユウキ！ちょっとその本かせ……！」

「うわ！」

アランとステイックは僕の腕から本を剥ぎ取ると興奮しながらページをめくり始めた。

そんな二匹の様子を見ながら、僕はしばらく考えていた。今まで情報からして……キップ隊長とヒルトンさんは親友だったけど、何か大きな亀裂が走り、今はほぼ絶縁状態のはずだ……なんで今更会いにくるんだ……？

「わからない……」

「何ぶつぶつ言ってるんだよユウキ！それよりほら！これ見ろ！

やっぱり伝説の洞窟はあったじゃないか！」

「ああ！さすがキップ隊長だ！言ってることが真実だ」

はたと、僕は二匹が先ほどのページを見ているのに気がついた。話しかけようと、ゆっくり立ち上がった瞬間。信じられない言葉が僕の耳に入ってきた。

「これでやっと国に帰れるなアラン……」

「ああ……！もちろんだスティック！」

「おい！」

僕の叫び声に、二匹はびっくりして振り向いた。

「どういうことだよ？帰るって——」

スティックは立ち上がって、僕の肩に手をかけた。

「そのまんま……俺たちの国に帰るってことだよ」

「……なんで」

スティックは視線を床に落とした。

「帰らなきゃいけない理由がある」

「……なんで」

「うざったいな！」

僕とスティックのやりとりに痺れを切らしたかのようにアランは立ち上がった。そして顔を僕の顔のギリギリまで近づけると、叫びながら言った。

「俺らの国は今内乱状態が続いてるんだ！だから特殊能力を持つ俺たちが行けば、納まる可能性があるんだよ！だからどうしても帰らなきゃいけないんだ！そういう——お前だって、自分の国に帰りたいんだろ？」

「僕は！まだ……みんなと一緒に居たい！何でだよ……ジェニーも加わって、まだまだSOSも来るよ！この国のネズミ達だって助けが必要なんだ！怪物のロイドですら助けを必要としていた！僕たちはこの国の特殊部隊員だ！」

「うるせえ！」

アランはそう叫ぶと本をわし掴みにして部屋から飛び出していった。

スティックは、僕の肩にやさしく手を乗せた。振り返ると、スティックは苦笑いをしていた。

「……スティック」

「そういえば、俺たちお互いのこと何も知らなかったな——ユウキ。お前、どこから来たんだ？」

「…人間界」

「！！！」

それを聞いたとたん、スティックは、まるで腫れ物にさわったかのような表情で僕から手を引いた。そして、鬼気迫る顔つきで僕から逃げるように一歩下がった。

「な、なんだよ——どうしたんだよ!？」

「……来るな……! こっちに来るな!! 裏切り者が!」

スティックは、部屋に落ちていた数冊の本を思い切り僕に投げつけると、物凄い速さで部屋から飛び出ていった。

やがてジェニーが部屋に戻ってきたとき、僕は部屋の中心でへたり込んでいた。ポツカリと開いた巨大な空虚感と、きつと二匹は戻ってくるという期待感で、頭が一杯だった。その様子と、部屋の乱雑具合をみて、ジェニーは少し考えた後に僕の肩をゆすった。

「おい、何があったんだ」

「…」

僕は白濁とした頭で、先ほど起こったことを物きりになんとか話した。

「…それは意味がわからないな」

ジェニーはまた考え込むと、立ち上がろうとしない僕の肩を抱えた。そしてそのまま部屋から引きずるようにして部屋から出た。

「とにかく、キップ隊長に話すぞ」

「……」

ずるずると引きずられながら、やがて僕は重厚な木のドアの前にたどり着いた。するとドアの向こうからキップ隊長の叫び声が聞こえてきた。それを聞いて壁の影に隠れる。

「裏切り者が、今さらどんな顔して私に会いに来た!!??」

「違うんだ：俺はただキップ隊長と昔の話でもしようかと……」

ウラギリモノ：先ほどのステイックの言葉が回らない頭で反響した。そして次の瞬間、ガシャーンという何かが倒れる音と、ヒルトンさんがドアから飛び出してくるのは同時だった。頭を抱えながら、ヒルトンさんは一目散にバブルフレッシュャーまで走っていき、視界から消えてしまった。それを見たジェニーは、辺りの様子を伺いながら、ぶら下がっている小枝でドアをトントンとたたき、「失礼します」と言った。すると中から「どうぞ」という声が返ってきた。

ジェニーは僕を引きずりながら、ドアの中に入った。するとそこには驚いた顔をしているキップ隊長の姿があった。

「どうしたんだ……」

キップ隊長に事情を話そうとしない僕を見て、ジェニーは先ほどのことを隊長にすべて説明した。キップ隊長は顎に指を添えながら、顔をしかめた。

「それは、彼らの過去をしらないことには——」

「一体なんなんです！ユウキに八つ当たりするほどの過去ですか！？」

ジェニーは、僕のために怒っているようだった。キップ隊長は仕方がないとはかりに僕らを部屋の奥の部屋に招き入れた。そこは大きなベッドと小さな木の机が一個あるだけの、寝室のような場所だった。ふと、ジェニーが机の上に置いてある小さな絵を手にとった。僕もふらつく足でそれを覗き込んだ。するとそこには、若い頃のステイックとアランと共に、肌色のような毛色をした僕に似たネズミが笑っていた。ジェニーは色彩の薄い瞳でそれを見つめると、キップ隊長のほうを見た。

「これは…？」

「…それは、スティックとアランとマルコの絵だ」

ジェニーが静かに机に置いた絵を、僕はもう一度手にして覗き込んだ。

キップ隊長は部屋の隅においてあったベッドに座って、深呼吸をすると、その青い瞳で僕のほうを見た。すべてを見透かすような瞳に見つめられ、僕はかすんでいた脳が徐々に覚醒して行くのを感じた。

「マルコ・トラストは死んだんだ」

隣でずっと冷静な顔をしていたジェニーの表情が、強張った気がした。

「しかも…親友だった彼らを裏切って……」

8 チーズ目…旅立つ理由。

「…裏切ったって…!! 何で…教えてください隊長! 何があったんです!？」

僕は隊長ににじり寄り、隊長の黒い制服をすがりつくように握った。隊長のひげがピクリと反応する。ジェニーは僕の腕を強引に掴むと一気に隊長から引き剥がした。そして僕を睨みながら床へと突き倒した。おもわず尻餅について、体に衝撃が来る。

「落ちてけよユウキ——…」

「……」

隊長は、不自然によれた制服を整えながら僕を見下げた。

「彼らの過去は…彼らのものであって、私から話すようなことではない」

キップ隊長はベッドから立ち上がり、黙っている僕の首根っこをいつかのように掴んだ。そして勢いよくたたせると、無表情な顔でつぶやいた。

「しかし…ヒントはやろう」

「…え…」

「スティックとアランはおそらく伝説の洞窟に向かっている」

ふらついていた体に力が戻ってくる。ジェニーはいそいそとキップ隊長の部屋から出ていくと、周りの様子を見回しながら自らの剣を確かめた。

「私が、伝説の洞窟に連れて行ってやろう。場所は知っている…ただし、そこまでの道のりは甘くないがな…」

「……」

僕は迷っていた。このまま追いかけて、何の意味があるんだろう。なんにしろ、僕は彼らを傷つけた。彼らは内戦状態の国に帰りたい。止める理由等…あるのだろうか。

黙っている僕に、キップ隊長は首根っこを解放しジェニーが開けていたドアから出て行った。

そしてまだ唯一部屋に留まっている僕のほうを見ると、

「来るのか来ないのか、ハッキリしろ」

と言い放った。

僕は手を握り締めると、部屋から飛び出た。キップ隊長は自らドアを閉め、鍵をかけた。もう部屋には戻れない。僕と隊長とジェニーは、バブルフレッシャーに乗って一気に下った。透明な壁から見えるこの景色を見るのは、これで最後になるかもしれないのか：そう思うと、体にまとわりついて癒してくれる緑の気泡が、やけに名残惜しかった。フワフワと浮く体、目を閉じて、力が抜けていく体に、ふと僕は不思議な感覚になった。

遠い：どこかで僕を呼んでいる記憶――。

小さい僕は泣いていた。周りで大人が怪訝そうに見ている。おもちゃ売り場の目の前で、母親は僕を置いていった。原因は僕が高価なおもちゃを、どうしてもほしいとダダをこねたから。叱られても叩かれても、どうしても欲しいと泣く僕に、母親は愛想をつかしてどこかへ行ってしまった。僕は泣いて泣いて、どうしてもここまで泣くのかというほど泣いた。やがて一人のおじさんが僕におもちゃを差し出した。それは、僕が欲しかったモノだった。

「おじちゃん：これ僕にくれるの？」

「ああ：」

僕は白髪で優しそうに微笑むおじさんを見て、飛び上がって喜んだ。

だけどそのおじさんは僕の頭を撫でるとこういった。

「だけど：自分の欲しい物は：自分で手に入れなきゃダメだ：人に頼ってばかりだと、弱い人間になってしまうから――」

「…うん…」

幼い僕にはその言葉の意味は理解できず、ただなんとなく頷くばかりだった。

「本当に、いいのか？」

キップ隊長の声で、僕はようやく目を開けた。そして、先ほどの体験はなんだったのかと首をひねりながら、力強く返事した。

「……ハイ！」

それを聞くと、隊長はあのおじさんのようにニッコリ微笑んでバブルフレッシャーから降りた。僕も降りる。

あのころは、人に頼りつきりだった。だけど今は――違う。自分の欲しいものは自分で手に入れる。おじさんの言っていた言葉の意味が、少しわかった気がした。

ふと、目の前を通り過ぎた隊員が僕を見て、「どこかへお出かけですか？」と言った。

キップ隊長は彼を捕まえて念を押した。

「伝説の洞窟へ行ってきた：何か会ったら、ここから東に10D程歩いたところにある、巨大な滝のある場所に来い。そこに俺たちはいる。：が、このことは誰にも言うなよ！騒ぎになったら面倒だから」

隊員は固く頷くと去っていった。どうやら彼は使命感が強いようだ。

「じゃ、行くぞ！」

「ハイ！」

そうして、僕は居住区から出ると、急いで伝説の洞窟へと向かった。

「ボス！ボス！大変です！」

「何だ騒々しい…」

灰色ネズミは警察署に駆け込んできた。漆黒のネズミは飲んでいた液体を机に置くと新しい茎を取り出した。そしてそれを悠長に啜える。

「ボスの探していた歴史本！奴が持っていました！」

「何だと——」

漆黒のネズミは直ちに白ネズミのワゴンを手配し、二匹でそれに乗り込むと全速力で特殊部隊の居住区へと向かった。

「どういうことだ…詳しく話せよ」

「ハイ…それが——」

やがて二匹のネズミはあっという間に居住区に着くと中へズンズン進んでいった。そして一階に居た黒い制服を着た隊員と思われるネズミを捕まえ、にじり寄った。

「な、なんで警察の方がこんな場所に…」

「いいから答えてもらおうか？」

「え？」

漆黒のネズミは、辺りに誰もいないのを確認して隊員を壁に押しやった。そして懐から鋭いナイフを取り出して、隊員の首へと押し付けた。

「…キップ達。奴らはどこに行った!？」

「——知りません」

「嘘だ」

「知りません！」

一向に口を開こうとしない隊員に苛立った漆黒のネズミは、ナイフで隊員の腕を切りつけた。隊員は慌てて腕を押さえたが、ポタポタと間から滴り落ちる自らの血と、その痛みに顔をゆがませた。

「：さあ、言わないと：もつと痛い目に会うぞ？」

「何で：警察がこんなこと：！！！」

「関係ないだろ：奴らはどこに行った？」

すべてを隊員から聞き出した漆黒のネズミは、用がなくなったばかりに隊員を切り殺すと、死体を居住区の泉に投げ入れて、すぐさま灰色のネズミに命令した。

「ひたすら東に進め！途中で実験場に寄るのを忘れるな：アイツも連れて行く」

「了解！」

二匹のネズミの乗ったワゴンは、白い砂を巻き上げながら猛スピードで駆けていった。

僕らはひたすら白い道を歩いた。徐々に熱くなっていく空気と高くなっていく太陽の高度、僕はにじみでる汗をぬぐった。そして歩いてきた道を振り返ると二本の高い木はもう点のようになって、見えるか見えないかぐらいだった。

旅の一日目は、時々現れる、黄土色の体に小さな耳、そしてツンとした鼻のキツネのような生物は、僕らについて回って、なんとか食料をくすねようと可愛い顔をしてみたりした。僕はそいつをチツチツと舌で音を出して追い払おうとしたが、逆にその鋭い爪で顔をひっかかれてしまった。あまりのヒリヒリ具合に思わずくしゃみが

出た。

途中で流れる川を渡っているときなんか、ジェニーは菌の生えた角の突き出ているイルカのような生物に足を何度もかじられたし、広大な茶色の土地を歩いているときなんかいきなり出てきたモルラツトの子供に懷かれてしまい親モルラツトに殺されそうにもなった。しかし隊長は覚醒もせずやつつけてしまった。

二日目。急な崖にある細い道にさしかかり、僕はへっぴり腰で崖から落ちそうになった。すると旅をしていたロイドの群れが助けてくれた。僕とジェニーとキップ隊長は、ロイドの群れに再び乗せてもらって切り立った崖を一気に超えた。

ロイドはあの後ムクリナ養育所でたらふくエサを食べたらしい。おかげで群れはすっかり元気になって、あれから各地を転々としながらエサを探しているとのこと。シャローナ草原には、ムクリナが増えるまで戻らないそうだ。崖を越えたところで僕らはロイドの群れと別れた。

三日目から五日目は、ひたすら森の中を歩いた。モルラツトと戦った森とは別の森で、一日中霧がかかっている深い場所だった。ジェニーは突如現れた一角の羽の生えた黒い馬と、一時は戦闘しそうな勢いだったが、そのまま背中につけて操ってしまった。彼らは散々森の中を駆け回った後に、食料をこれでもかというほど携えて戻ってきた。おかげで僕らのぺったんこになっていた胃はまた満腹になった。

夜は焚き火をしながらキャンプをした。森の木は背が低く、真っ暗な空には一面星が輝いていた。静かな森は、耳をすますといろいろな生物の寝息や鳴き声が聞こえてくるようだった。実際寝ていると、ガサガサという物音と共に、全身が白の毛玉のようにフワフワした生物が僕の葉っぱの布団の中にたくさんもぐりこんできた。そいつらは毛が抜けやすい体質らしく、朝起きると僕の体は毛まみれになっていた。さらに布団の中には寒そうに震える、ところどころフワフワの毛が残っているピンクの生物が居た。

6日目から洞窟に着くまでは、ほとんど砂漠を歩いた。たまにある水溜りに顔をつけて、一気に水を飲むのは病み付きになった。それからの記憶は、あまりの暑さで覚えていない。

やがて、僕らは伝説の洞窟にたどり着いた。

洞窟は、滝の裏側にあって、なかなか見つからないようになっていた。そもそも、こんな退廃の土地に来るネズミなどいないだろう。ゴツゴツとした岩場に囲まれて、草はほとんど生えていない。あちこちから水蒸気が噴出している。

「ここですか？ キップ隊長」

「ああ、間違いない」

ジェニーは暗闇が続いている洞窟の入り口に立つと拾った木に火をつけた。木の周りだけがパアと明るくなる。僕とジェニーが、洞窟に入ろうとした瞬間、背後からチュウチュウというわめき声が聞こえた。振り向くと、そこにはどこかで見た顔が居た。

「……クレイヴ・ドルマン……さん??」

僕が不思議そうに尋ねると、漆黒の毛色のネズミは笑った。ネズリンピックで商品をくれたネズミ——？

「いかにも……」

「……それで、警察のトップがこんな場所に何の用かな？」

キップ隊長は爪を光らせた。それを見たクレイヴさんは、涼やかに指を鳴らした。すると、何か巨大で重いものが歩くときの反動がし始めた。ズシン、ズシンと、何かが近づくたびにジェニーの剣がカタカタと揺れた。

次の瞬間、岩場の影からどす黒い頭が現れた。黄色い目は、キョロッキョロと何かを探すように動いた後、僕らを見て一気に充血し

た。

「…ディノシュレッダー…」

「…そういうことか…」

ジェニーは剣を取り出すとディノシュレッダーに向けた。

「ネズリンピック…どうも胡散臭い気がしたんだ…こいつの力試しだったのか…」

クレイヴさんはジェニーの言葉を聞くと悲しげな顔をした。

「そうなんだよ…商品の中に、ここへのヒントがある本があったと気づいていれば——こんなことにはならなかったのに…」

クレイヴはディノシュレッダーに飛び乗ると、こちらへ向かってきた。

「まずいっ…！ひとまず洞窟内へ入れ！」

9 チーズ目…あの日起ったこと。

「隊長…！どうするんです！？」

「逃げるぞ…ここの洞窟は複雑に入り組んでいるから、逃げ切れるはずだ！」

僕はゴツゴツした岩を蹴りながら、全速力で洞窟を駆け回った。ジエニーと隊長は僕よりも足が速く、少し置いていかれる形になる。背後のディノシュレッダーはどんどん加速をつけて迫ってきている。パラパラと天井から粉が降ってくる。

「カスはカスなりに、早くこいつに食われるたほうが楽だぞ！」
クレイヴ・ドルマンのどすの効いた声が暗い洞窟内に反響する。次第、僕は肺が空気を求めて軋むのを感じた。深く息をするようにして、足元をみなかったその一瞬、地面から飛び出た岩の角に膝がぶち当たった。視界は一気に反転して暗くなる。顔や体が岩と激しく擦れる音が聞こえた。

「何やってるんだユウキ——…！」

ジエニーは勢いのついた体をひるがえすと、そのままスピードを殺さずに僕の方へ素早く向かってきた。しかしこの距離からして恐らく僕の方に先に着くのは…

「馬鹿なネズミ達だな…どうせディノシュレッダーのエサになる運命だというのに…！」

急いで体を起こすと同時に、頭上から大きな牙が降ってきた。目の前に真っ赤な牙が現れる。

そのとき、僕はいつかの場面を思い出した。森。洞窟。頭上。モルラット——

瞬時に、頭をかばう様にして腕を交差させたが、全く手ごたえがない。それどころか、僕の足元にはポタポタと白い粘着質な液体が垂れている。

「…？」

ゆるゆると腕を戻すと、目の前に光景は凄まじいものだった。大きく上下に開いたディノシュレッダーの赤い口を、牙には触れないようにしてキップ隊長が抑えていた。足元にある液体は、どうやら怪物の口から吐き出た唾液らしい。隊長の体は重みに耐えるようにして震えている。

「隊長：！！」

「：っ」

キップ隊長が息を呑んだ瞬間、ディノシュレッダーは体の力を一気に隊長に乘せるようにして突進した。踏ん張っていた隊長の足が岩場ときつく擦れて僕の方へ押されてきた。さらに口をガチンと閉じると反動で外れた隊長を回転しながら尾で吹き飛ばした。硬い皮膚と隊長の柔らかい体が衝突し、よれるのが見えたと思った瞬間、尾の風圧に巻き込まれて僕も同じ方向へと飛ばされた。洞窟の壁に激しく叩きつけられ、切り裂くような体への打撃が走る。目の奥がチカチカするような光が見えた。

「：ぐ：」

「ユウキ。ここは私がやる」

そのまま重力にひきつけられ僕と隊長は地面へとへたり落ちたが、キップ隊長は素早く立ち上がった。ぼやけた視界で血がついた隊長の腕が見える。あれほどの腕力で叩きつけられたんだ、ダメージがないはずがない：まだ視界がチカチカしている僕の方を見ると、隊長は静かに微笑んで呟いた。

「お前は洞窟の奥へ進め」

「でも：」

「：お前は私が、負けるとでも思っているのか？」

嘲笑を含んだような声に、隊長を見上げた瞬間、暗闇の中でたいまつが見え、一瞬にしてジェニーが現れた。そして力強く僕を立てると、研ぎ澄まされた雰囲気僕を押し出すようにして洞窟の奥へと走り出した。僕は走りながら確認するようにして後ろを振り返った。するとキップ隊長は尾を振り回すディノシュレッダーを避け

ながら、僕に叫んだ。化け物の唸り声が洞窟を揺らして、それに呼応するようにして隊長の体は覚醒していった。目に見えて鋭利化していくキップ隊長の体。その表情は覚悟と怒りに満ちていた。覚醒したら、本人の意思とは関係なく敵を殺していく。…自我が消えうせる最後の瞬間、隊長は僕に向かって叫んだ。

「お前の望みは——お前で叶えろ！」

洞窟の突き当たりを曲がった瞬間、隊長は見えなくなった。

「……ジェニー」

「…何だ？」

僕は後ろを振り返らずに、うつむいていた。

「スティックとアランに会わないと」

「ああ」

どんどん回転が速くなっていく自分の足を見る。隣のジェニーの剣が、鎧が、規則正しい音を鳴らしている。

「隊長、大丈夫だよな」

「当たり前だろ」

隣の声の主が、あまりに淡々と告げるもんだから、僕はうつむいていた顔を上げた。暗い暗闇を、ジェニーのたいまつだけで照らしながら駆けていく。入り組んだ洞窟は坂道のような傾斜が出来ていて、ふとももに力を入れて一気に上って行くと、やがて光が見えてきた。

「光だ…」

ジェニーは眩しそうに目を細めた。

「さて…どっちから殺してやろうか」

「…」

物音ひとつしなくなった暗い洞窟内で、漆黒と黒の毛色のネズミはお互い牽制しあっていた。

どす黒い体を揺らしながら、ディノシュレッダーは背に乗っている小さなネズミの指示を待っていた。先に動いたのは、クレイヴの方だった。薄ら笑いを浮かべ、指をパチンと鳴らす。すると岩の陰から何かが素早く駆け寄ってきた。

キップは、暗闇のせいでそれが何か分からないようだったが、待てないとばかりにディノシュレッダーのほうへと詰め寄った。

クレイヴは、そばの陰に何かを告げると、うずうずしているディノシュレッダーにすぐさま命令を下した。

「先に行った二匹を追いかける！」

それを聞いたディノシュレッダーは、大きな牙の並んだ口から涎を吐き出し、一気に走り出した。進行方向に立ちふさがるように立っていたキップがそれを見逃すわけはなく、牙をむき出し、爪で襲い掛かろうとする。

「キップ！！！！」

「――！？」

どこかから聞こえたその声に、キップは一瞬躊躇した。その隙を狙い、クレイヴとディノシュレッダーは加速してキップの頭上を駆け

抜けていった。間髪居れずに黒毛のネズミはディノシュレッダーを追いかけてようとしたが、背後から忍び寄った何かが彼を押し倒して馬乗りになった。キップは、影の顔を見て、殺気の漂っていた表情をさらにきつくした。ひげがピンと張り詰め全身の毛は立っている。フーフーという荒い息と共に、キップは影の名前を告げた。

「ヒルトン：！！！」

影、こと灰色のネズミはそれを聞くと素早くキップの上から飛びのいて間合いを取った。そしていつものように礼儀正しく微笑むと、いつでも爆発しそうなほど張り詰めているキップの雰囲気을諭すように呟いた。

「キップ：いや、キップ隊長。久方ぶりですね」

「何故、お前がこんなところに——！！」

ヒルトンはキョトンとした目でしばらく考え込んだ後、うれしそうに尾を振りながら言った。

「ただの偶然でしょう」

それを聞いたキップの爪が、かつてないほど巨大化した。

「何：だと：？」

「：」

突如キップは巨大化した牙でヒルトンに襲い掛かった。鋼鉄のような岩に、鋭く牙が突き刺さる。キップが血走った目で辺りを探ると、近くの小高い位置にある岩に飛び移っていたヒルトンが冷たい表情で見下ろしていた。それを見た黒ネズミはますます唸り声を震わせた。

「お前：！！あの事を忘れているんじゃないだろうな：！！あの時起こった：！！」

「もちろんですよキップ隊長：忘れるわけが：」

「嘘をつけ！！」

ヒルトンがしゃべり終わる前に、巨大な牙が岩を粉々に破壊した。素早く岩から岩へと飛び移るヒルトンを、キップは血眼になって追いかけて続けた。その鋭い牙がありとあらゆる岩を粉碎して、粉にし

ていく。洞窟の壁から突き出している岩は、あとひとつのみになった。パラパラと、岩の粒が地面に溜まっていく。

「あの日…お前がしたことは…何があろうとも許さない！」

「……わかっています！」

キップは最後の岩場を破壊し、ヒルトンは軽やかに地面へと舞い降りた。灰色と黒毛のネズミは対峙するような格好でにらみ合っている。

「——サラは…サラ・リバーズはお前のせいで死んだんだ！」

「…」

ジャリ、という砂を踏みしめたような音がして、キップは血走った目から水が零れてくるのを止められなかった。喉の奥からくぐもった声を発した。

「お前はサラを殺したんだ！」

「…」

次の瞬間、洞窟を纏っていた空間がグニヤリと捻じ曲がった。暗闇がユラユラと揺れる。渦を巻くようにして捻じ曲がっていく空間は、やがてあきらかに洞窟ではない情景へと移り変わっていた。そこは、あたり一面に色鮮やかな花が咲き乱れ、切り株の上で小鳥が楽しそうに鳴いている場所だった。

「…ここは——」

「…僕が作り出した過去の空間です」

ヒルトンの言葉に、キップは驚くようにして目を見開いた後。その口を震わせながら、搾り出すようにしてかすれた声を出した。

「サ…サラ…」

二匹の目の前には、エメラルドグリーンの瞳をした淡いブラウン色の一匹の美しいネズミが花を摘んでいた。しなやかな手つきで赤い花を摘むと、持っていたカゴの中へと丁寧にいれる。そして何かに

弾かれたように立ち上がると、後ろで腕を広げて待っているネズミの方へと駆け寄り、その腕の中に飛び込んだ。

「……」

そのネズミは若かりしころのヒルトン・モックだった。二匹は近くの横木に座ると、すぐさま寄ってくる白い毛玉のような生き物に囲まれた。サラといわれるネズミはカゴから花を取り出すと、それを丁寧に結び始めた。しかしあまり器用ではないのか、なかなか仕上がらないそれを、隣のヒルトンは笑いながら取るとあつという間に仕上げてしまった。

拗ねたように頬を膨らませるブラウン色のネズミを、愛しそうな目で見つめる灰色のネズミ。それはどこからどうみても、仲むつまじい恋人同士にしか見えなかった。

しかし次の瞬間、呆然と立っていたキップの周りの視界は、急に早送りのようになり背景がどんどん流れていった。スクリーンに映るように見えていた二匹は消えて、満開にさいていた花畑は散るようになくなって、辺りは崖のような場所に移った。

そこがどこかということ、キップが認識した瞬間、崖の淵に先ほどの二匹のネズミがぶら下がっていた。ブラウン色のネズミの呟きに、灰色のネズミがなにやら必死に叫んでいる。恋人のネズミは今にも崖の底に落ちそうで、それをヒルトンが支えているような感じである。二匹がしゃべっている言葉は、一切聞こえてこない。すると離れそうで離れることのなかったブラウン色のネズミの手と、灰色ネズミの手がそのままスローモーションのようにゆったりと滑るように解けた。その光景はやがて一気にゆがんだ。

「やめろ：やめろ！ヒルトン：ッ」

牙をガチガチと震わせながら、キップは自らの頭を抱えた。砕けた岩の破片の塵に、膝から崩れ落ちる。まだ微かに残っていた空間は、

ぐるぐると回りながら元の薄暗い暗闇に戻った。シンとした静かな洞窟内と、黒毛のネズミは一体化するように解けて混じった。

「……」

やがて、ひげの震えが収まったキップは、すばやく灰色ネズミの方を睨んだ。覚醒していたはずの体は、いつの間にか元に戻っていた。

「ヒルトン……先ほどの空間はお前が作ったって言ったな——」

「はい……私の能力は空間をいじることですからね……」

「もしかして……20Dほど前に、モルラットの洞窟からシャローナ草原に俺たち部隊を飛ばしたのは……」

ゆるりと体を動かしながら、ヒルトンはまだ動けないでいるキップに近づいた。そして首根っこを掴むと、涼やかな目を極限まで近づけた。灰色のネズミは、愉快そうに口の縁を持ち上げた。漏れるような笑い声が漂う。

「……お察しのとおり——私ですよ……」

「何であんな事をした……!? ユウキが居なかったら私たちは死んでいたんだぞ……」

「……それが狙いですよ。貴方は何かとクレイヴさんを敵視していましたからね……」

ギリギリと、徐々に強めていくヒルトンの手。

「あの人は……貴方に部隊を追い出された私を……暖かい目で守ってくれた……あの人がその真の優しさだ!」

やがて、こう着状態で張り詰めていた両者の空気が破られたのは、キップのうなり声からであった。バチンという乾いた音と共に、キップはヒルトンの頭上を飛び越えて洞窟の奥を見た。

「これで分かった……もはやお前にかまっている時間はない……!! 私クレイヴを止める!」

「そんなこと……絶対にさせませんよ——」

二匹はお互いに絡みながら、瞬間移動をするかのように闇の奥へと走っていった。

10 チーズ目…幻の森

「こ、これは…」

「なんで洞窟の中に——…」

僕とジェニーは確かに洞窟の中に居る。しかし目の前には巨大な森が広がっていた。

どこから吹いてくる風で、ぼやけた生命力を滲ませている新緑が揺れている。ふと背後に気配を感じた。

「もし」

「!」

慌てて飛びのくと後ろには見知らぬ老ネズミがいた。服装からして探険家のような。古ぼけた毛糸の帽子に暖かそうな服。この非常事態にどこから……

「貴方も探検家ですか？」

「え…」

「そうです」

僕の変わりにジェニーがニコニコしながら答えた。隣の青いネズミは僕の耳に口を近づけると視線を走らせながらつぶやいた。

「ここがどこか…いったいこの森は何なのか…分かるまでは極力敵を作るな」

「…分かったよ」

僕がため息をつくとき、目の前の老ネズミは微笑みながら手を差し出した。僕はいそいそとその手を握って握手をした。

「よろしく。私は異世界を旅する野ネズミのロバートです。あなた方はどうしてここに？」

「僕はユウキで、こっちの青いのはジェニーです、えっと…友達を探しに」

「ほう…友達？それはすばらしいですね。私も協力しますよ」

ロバートさんはそう言ってまた笑った。僕は彼が悪いネズミなどに

は見えなかった。隣のジェニーも、最初は警戒していたが、やわらかい彼の手と握手をした瞬間にそれは解けたようだ。

歩いているしめった泥道以外の地面は、背丈の低い草花に覆いくされ、その間をこじ開けるようにして背丈の高い木がところ狭しと生えている。生えている鮮やかな花は、この世のものではないかのように美しく咲き誇っていた。地面の下を流れているのか水の音が、何故か地上にもれている。しかし僕は歩いているうちに、あることに気がついた。草や木は脈々と鼓動をしているが、それら以外の生物の気配はまったくといっていいほどしないのだ。なんとも不思議な空間。僕はあたりを見回しながら、先頭を歩くロバートさんに尋ねた。

「この森はいったい何ですか？」

「は？ここを知らないとは…珍しいですね君も」

「??？」

すかさず地面からロバートさんに視線を移す。

「ここはあの有名なドルヴァースの森ですよ」

「……!？」

僕はその言葉を聴いて脳内に電流が走ったかのような感覚に襲われた。記憶の断片が一つ一つ重なっていく。それはまるで壮大なパズルが出来上がるときのような緻密な作業で。

ドルヴァース…ドルヴァース…どこかで見た気がする…世界一の森…美しい森…

僕があと少しで思い出せる、と頭を抱えた瞬間、隣のジェニーがいきなり銀の鞘から剣を取り出しロバートさんに突きつけた。そして今まで見た事のないような険しい表情で唸りながら叫んだ。

「馬鹿な事を言うな!!!…ドルヴァースの森は、30Y前にこの世から消えている!!!」

「は…??？」

それを聞いて最後のピースがカチリと嵌る。確か歴史書に載っていた――

『ドルヴァースの森：昔ネズシテイのできる前の土地にあった広大な森で、その美しさは世界一と謳われていた。しかしネズシテイのネズミの数が増えるに伴い、森の木は伐採されつくし今では後かたもなくなってしまった幻の森である』

「あ！！」

僕は思わず叫んだ。歴史書にのっていた絵にそういえばそっくりである。しかし一つだけ歴史書と違う箇所があった……それは森の名前にもなっているドルヴァースの存在：

「それは嘘だ：現にドルヴァースの森はここに存在しているではないか！！」

ロバートさんは突きつけられた剣から逃げるようにして地面に尻餅をついた。ジェニーは逃がさないとばかりに老ネズミににじり寄った瞬間、背後から荒い息と共に聞きなれた声がした。

「……やめろジェニー！！」

「キップ隊長！？」

慌てて振り返ると、そこには全速力で走った後のキップ隊長がいた。隊長は息を整えながら、僕に歩み寄った。そして不満そうな顔をしているジェニーに、すぐさま剣を下ろせと命令した。ジェニーは渋々剣を鞘に収めた。

「部下が大変失礼なことをしました：」

「……いや、いいんですよ」

隊長の差し出した手をロバートさんは握って微笑んだ。老ネズミがゆっくりと起き上がると、隊長は青い瞳を輝かせながら、森を見回した。

「じつに美しい森ですね……」

「そうですね」

啞然としている僕とジェニーを差し置いて、ロバートさんとキップ

隊長はお互いに微笑みあった。しかし、隊長は地面に咲いているあ
る花を見つけた瞬間、表情を変えた。

「これは……!!」

すばやく駆け寄ってその赤い花を摘み取る。そして匂いをかいで確
信したようにいきり立つと、震えるような小さな声で老ネズミにつ
ぶやいた。

「もしやここは…あのドルヴァースの森ですか…??」

「ええ、そうですよ」

それを聞いた瞬間、キップ隊長は森の天井を見上げて叫んだ。

「サラ…!!」

すると、その叫びに反応するように森の木々はいつせいにざわめき
始めた。色とりどりの花びらが、風に乗って僕らの周りを取り巻き、
葉の擦れるザワザワという音がする。

あたりが白く柔らかい光に包まれ、僕とジェニーは目を細めた。震
えているキップ隊長のその先には、ブラウン色の美しいネズミが立
っていた。

「サラ…本当にお前なのか…!?!」

「……キップ兄さん…」

隊長はもつれる足に戸惑いながらも、サラと呼ばれるネズミのほう
へ歩み寄った。隊長は透けるような光を帯びているサラの手を掴も
うとしたが、その手と手が触れ合うことはなかった。

僕とジェニーは驚いた。それは何よりも彼女が実体ではないという
ことを示していたからだ。しかし隊長はわかっていたかのように悲
しみに満ちた表情をしてその場で膝を崩した。

「サラ…やっぱりお前は——…死んだのか」

「……」

サラと呼ばれる彼女の透けた両腕が、隊長を包み込んだ瞬間、凄ま
じい轟音と共に地響きがした。僕とジェニーが隊長たちを守るよう
にして立ちふさがると、そこにはディノシュレッダーの乗ったクレ
イヴとヒルトンさんがいた。ヒルトンさんは軽やかにディノシュレ

ッダーから花畑に飛び降りると、爽やかに微笑んだ。それを見たジェニーは、目の前の光景を振り払うかのように剣を振り向けた。

「何で貴方がここに――」

「…やあジェニー…君と戦うのは心外だよ…」

微笑みながら僕らのほうへ歩み寄ろうとしていたヒルトンさんはキップ隊長とサラと呼ばれるネズミに気づくと、その動きを止めた。ひげがピクピクと動いている。

「…サラ」

「何をしているヒルトン！ さっさと奴らを始末しろ！！！」

クレイヴはデイノシュレッダーの上からヒルトンを見下ろした。

「サラ！！」

しかしその声に、ヒルトンさんはまったく反応しなかった。それどころか、キップ隊長の方へとフラフラ歩き出している。

「何をしている…！？」

クレイヴがヒルトンに近寄ろうとしたが、ユウキとジェニーがそれをさえぎった。キップは涙に濡れた瞳で立ち上がると、サラに近寄ろうとするヒルトンの腕を掴んだ。

「ヒルトン…今さら何しにきたんだ…！？」

「…彼女に…会いにきた」

フワフワと光るサラは、震えるヒルトンに手を差し伸べた。ヒルトンはそれをしっかりと掴んだ。…本当は、つかめていないのだけれども――ヒルトンさんの黒い瞳からは、涙が溢れ出てきているようだった。

「サラ…会いにきたよ…」

「ありがとうヒルトン…もう会えないかと思ってた…」

キップはその様子を見つめていた。三匹の周りの草は風に吹かれて、赤い花で満開になっていた。風が吹くたびに赤い花びらが飛び散る。サラは、ヒルトンの涙で濡れた頬を両手で包んだ。その瞬間、辺り全体が光り、彼女を纏っていた光は消えた。その手は確かにヒルトンの頬を暖めていた。

「私が貴方の手を離れたから……貴方は会いにこないと思ってた」「まさか：君が居ない日々なんて：死んでいるのと一緒にだったよ……」

震えるような空気の中、しばらく呆然としていたキップ隊長はサラの手をとった。

「どういうことだ：ヒルトンはお前を殺したハズだ：！！」

「キップ兄さん：それは違う——」

サラはヒルトンに寄り添うと青い制服を掴んだ。膝まである草は、彼らを見守るようにして風に揺れている。赤い花びらが宙をヒラヒラ舞いながら草の地面へと落ちた。キップは自らの意思を貫くかのように必死で叫んだ。

「何が違う！！私はあの日見たんだ！！確かに助かる位置に居たお前が崖に落ちたのを！！」

「ヒルトンは：私を助けてくれた！！差し伸べてくれた彼の手を、私が自ら離れたのよ——！！」

「何故そんなことをする必要がある！？：お前はヒルトンに騙されているんだ！！」

「耐えられなかったのよ：！！」

サラの消えるような細い声にキップは息を呑んだ。

「：この国に来てから：部隊に入った兄さん達とは違って、私はいつも差別を受けていた……」

「何で：お前が白ネズミだからか：？！それは私がいつも考慮して……」

「——兄さんが差別者を排除するたびに、いつも私にしわ寄せが来ていた！差別を差別でなんか解決できないのよ！町のネズミから

は冷たい視線で見られて、もうここには生きる場所がないと思った……だから」

「だから……手を離れたのか」

キップのひねり出した様な返答に、サラは切なさうに顔をしかめた。隣で寄り添うヒルトンの彼女を握る手は、かすかに震えて、今度こそ離さないように、しっかりと握っていた。

「……ごめんなさい」

一筋の線を描くように、サラの頬には涙が流れた。ヒルトンはサラの頭をなでるようにして優しく抱き寄せた。それは、まるで冷え切った水を暖めるかのような仕草だった。

キップは草に頭を埋めるようにして頭を地面に擦りつけた。

「すまなかったヒルトン……私が……私が君にしてきたことは……最低だ……!! 君を部隊から外して……最低だ!! 許してくれなどといわない……!! ころおきなく殴ってくれ……」

「いいんです……僕も……貴方を殺そうとしたのは事実ですから……」

心なしか穏やかな声調で、ヒルトンはキップの腕を掴んで立たせた。たぐりよせられるようにして立ち上がったキップは、空ろな目で二匹を見つめた。

「また……あの時のように戻れるだろうか……?」

「……サラが許してくれるなら」

微笑んだサラを見て、キップは、人目も知れず、二匹を抱擁した。その瞬間、ひととき強い風が吹いて、森全体の花が一斉に飛び始めた。赤の花びらは、洞窟中にちりばめられ、その場で強い光を放った。透明な光の玉のようなものが森や洞窟内いっぱい流れ出す。三匹を包み込むようにしてやがてそれらは優しくはじけた——……

11チーズ目…悪魔の降臨

ジェニーは力強く地面を一蹴りし、ディノシュレッダーの足に銀の剣を突き刺した。しかし鎧のような硬い皮膚には全く食い込まず、それどころか跳ね返されてしまった。クレイヴは愉快そうに笑っている。

「クク…無駄だ！完全体となったディノシュレッダーには何も効かない…」

そのまま地面に転がるようにして受身を取ったジェニーを、僕はすかさずキャッチした。湿った地面で体を擦った青いネズミは、泥だらけになってしまった。

「…何て硬さだ——」

悪態をつくジェニー。それを見たクレイヴはほくそえんで、そして目下のディノシュレッダーに命令を下した。

「こいつらより、あいつらを殺れ！」

その指令を受け取った巨大な怪物はよだれを撒き散らしながら赤い花びらが渦巻く花畑の方へと走っていった。怪物が走るたびに太いしっぽのせいで生い茂った森の葉っぱがゆれる。僕は止めようと追いかけたが、何故かディノシュレッダーは急停止した。僕は泥だらけのジェニーと様子を伺った。すると、色鮮やかな花畑一面に赤い血が流れ出ていた。思わず息を呑む。

「…何故だ?？」

「…」

切り裂かれたヒルトンさんを見て、サラと呼ばれるネズミは体がまたばやけ始めた。瞳からは涙の雫が溢れ出している。声は出ないようだった。さらに隣で震えているキップ隊長は、目の色が青と黄色を行ったり来たりしている。クレイヴは、不思議そうな口調で言

った。

「お前……いつからそんな馬鹿になったんだ？ 何故こいつらを庇う？」

彼が倒れている場所はもはや血の海と化している。僕が駆け出そうとすると、ジェニーは首を横に振った。まだ、時じゃないとでもいうのか――？

ヒルトンさんは静かな口調で言った。

「私は……私は……もう大切な人を失いたくない」

「――」

「サラとキップを殺すなら、私を殺してからにしてください！」

「この恩知らずが……！！ならば死ぬがいい！！」

クレイヴは血走った目でヒルトンを睨むとディノシュレッダーは牙をヒルトンさんに突き立てた。しかし、次の瞬間僕の目の前に何かが飛んできた。

素早く体を翻して避ける。見ればそれは一本の巨大な牙だった。質量の重いものが叩きつけられるときの衝撃で、湿った泥が舞い上がる。

「ギャオオオオオオ！！」

洞窟全体に響き渡るほどの悲痛な叫び。それは牙を折られたディノシュレッダーのものであった。怪物はもんどりうって七転八倒している。怪物の足元で、キップ隊長は凄まじいオーラを出していた。絡みつくような長い黒い毛は逆立ち、全てを射抜くかのような黄色の目はギラギラと光っている。そして怪物の牙をも折る鋭いつめ。

「許さない……」

クレイヴは眉間に皺を寄せると暴れるディノシュレッダーにしがみついた。

隊長は目にも留まらない速さで怪物の頭部に移動すると、そこに牙を突き立てた。何も通さないはずの皮膚。それがジワリと切り裂か

れる音がした。怪物の悲鳴はさらに大きくなった。

「……やめろキップ!!」

「…許さない!」

次の瞬間、乾いた音がして怪物の頭部からは血が噴出しはじめた。隊長は爪でありとあらゆる箇所を切り裂きまくった。クレイヴはかろうじでその攻撃から生き延びている。しかし血眼になって怪物を守ろうとしている。

「…俺の可愛い化け物が!!…やめろ——!!!」

やがて怪物の悲鳴はやんだ。不気味なほどの静けさが森を包み込む。僕とジェニーはしばらく目を瞑っていた。そうしていないと、とても見れるようなものではなかった。

隊長の怒りは、それはそれは、凄まじいもので――…

「…フウ…フウ…」

荒い息と共に隊長は少し苦しそうな顔をした。それもそうだろう、特殊能力をあれだけ開放したのだから。花畑には、虫の息のヒルトンとすでに命を失ったディノシュレッダーが居た。赤い花と共に血の海と化した聖なる森は、クレイヴの泣き声だけが響いていた。

「ああ…ディノシュレッダー………可哀想に」

「何が可哀想だ…化け物の癖に…」

キップ隊長は目を細めてつぶやいた。それを耳にしたクレイヴはこれ以上ないほど牙をむき出した。

「黙れ!! お前に何が分かる…」

肩を震わせながら息を付くと、クレイヴは凄まじい形相で怒声を挙げた。ビリビリと、肌が千切れそうな程の唸り声。

僕はジェニーにしがみついたが、ジェニーもひたすら固まっていた。何度も覚醒し、倒れ込んでいるキップ隊長は弱々しい目でそれを見ていた。

「――!!」

先程、森から一斉に放出された光の魂。それらが全て、クレイヴの体に取り込まれていく。

空気が渦を巻き、森の草や花びらもドンドン吸収されていく。

「――馬鹿な……」

やがて静かになった洞窟内とクレイヴを、僕は呆然と見ていた。

「…お前らは全員……皆殺しだ」

深い暗闇を纏ったクレイヴが口角を持ち上げた瞬間、釘が巨大化したかのような鋭利な牙が見えた。それはディノシュレッダーの比ではない。

「……………!!」

「――逃げろおお!!」

僕は瞬時にまともにやりあっても勝てない相手だと察知した。僕はキップ隊長を抱え、ジェニーはヒルトンさんを抱え、一目散に走り出す。

「ハア……ハア……!!」

「くそっ……!!」

生い茂った森の樹木は僕らに味方したが、狂ったクレイヴの恐怖からは逃げ切れなかった。

「ギャハハハハ! 屑共があ……! 逃げ切れると思っているのかあ!?!」

洞窟内が揺れ、岩が砕け散る。ドンドン走っていくと、やがて森の出口らしき場所に着いた。

そこは、洞窟の天井がなく、巨大な吹き抜けの開けた場所になっていた。頭上には透けるような青空が広がっている。水竜と闘った場所に似ていた。どうやらネズシティにはこのような吹き抜けの洞窟

がたくさんあるらしい。すると、遠くの方で見慣れた顔が二匹立っていた。それを見た瞬間、僕は一気に心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

「——スティック、アラン！」

虫の息のヒルトンさんとキップ隊長を岩の影に横たえ、僕とジェニーは二匹の方へ駆けた。すると、スティックは物凄い形相で叫んだ。

「こっちに来るな!!」

思わず、足を止める。よく見ると、二匹は黒いホールの前に立っていた。何もない空間にポツカリと空いた暗闇。僕はそれが、時空を越えるモノだと気が付いた。彼等は已に、国へ帰ろうとしていたのだ。洞窟の壁が揺れて、振り向くと入り口にクレイヴが立っていた。

「………万事急須だな」

隣のジェニーが引き攣った顔で言った。

僕は目の前の二匹を見た。いつかみたいないな冷たい視線。拳を握り閉めるが、体の震えが止まらない。「∴教えて欲しいんだ。何故僕が裏切り者になるのか——」

「……」

しかし、二匹は黙っていた。

「殺してやる！ギャハハ、殺してやる！」

喚きながらこちらに向かってくるクレイヴを見て、ジェニーは剣をかざして静かに言った。

「∴ユウキ、俺が食い止めるから話をつけろ」

「危ないよジェニー！」

「人の心配をする前に、自分の心配を晴らすんだな！」

そう言い残すとジェニーは風のように駆けて行った。背後でクレイ

ヴの鋭利な牙と銀の剣が交わる軽快な音がした。

「……マルコは人間だったんだ」

不意に、アランがポツリと呟いた。

「……でも、それだけで——」

「それだけじゃない！」

言葉を遮るように、スティックは目をギラギラさせた。

「——マルコは俺たちを裏切って多くのネズミを殺したんだ！親友だったのに！信じてたのに！全てあいつが壊した！だから俺たちは人間界から来た奴を信じないって決めたんだ——！」

スティックの叫び声が洞窟中に響いた瞬間、勢いよくクレイヴの体から1つの玉がでて来た。その玉は、微かな光を放ちながらこちらへ寄ってきた。

「——？」

やがてスティックとアランの前に辿り着くと、玉は一気に光を放った。その眩しさに、思わず全員目を瞑る。

『……スティック……アラン……』

聞き慣れない低い声がした。ゆっくりと目を開けると光はネズミになっていた。僕の知らないネズミ。それを見たスティックとアランは、言葉を失った。

「————」

光はおぼろ気に言葉を紡ぎ出した。

『……すまない……お前達がまだ俺を拭い切れてないとは……』

アランは肩を震わせながら光に手を伸ばした。

「……マルコ……」

「どの面下げて出てきやがった！」

スティックは向こうを向き顔を見せないようにしていた。

『スティック、アラン……あれは違うんだ。俺の意思じゃなかった』
マルコと呼ばれたネズミはうつ向いた。

僕はふと思った。サラさんとマルコさんといい、ここの洞窟は死者

が蘇るのか……？

「お前以外に自分の意思を操れる訳ないだろ——！」

泣き顔のアランが叫んだ。入り込めない会話に僕が立ち尽くしている、背後から狂気じみた声がした。

「ヒヤハッ！それはどうかな？」

ズドン、と脇腹に鉛を打ち込まれのような衝撃が走り、僕は吹き飛ばされた。あつと言う間に洞窟の壁にたたき付けられると、久しぶりの凄まじい打撃に躰が悲鳴を上げた。同時に、息を呑んだ二匹を笑うクレイヴさんが見えた。

「……どういう事です？」

アランが縮こまりながら言った。

「ん？心が弱ったマルコくんを支配する事など簡単だった、という事さ」

「——！？」

僕は霞む視界の中でジェニーの方を見た。すると彼は洞窟の中央に血まみれで倒れていた。足を引きずりながら駆け寄ると、ジェニーは血に染まった顔をピクリとも動かさず、気絶していた。

12 チーズ目…命の羽

僕は動かないジェニーの肩を激しく揺さぶった。しかし、ジェニーはピクリともしなかった。

「そんな——嘘だろ…起きてよ……ジェニー！」

喉に悲しみがこみあげてきた。くぐもった声で僕はジェニーを揺さぶり続けた。

涙で視界が歪んできた。鼻が鳴り、口には力が入らず、僕は混乱していた。

「……ああ、死ぬなよ——…ジェニー」

力無くうなだれた瞬間、耳をつんざくような怒声がした。

「じゃあ…こいつは！マルコは！あんたに操られて村に火をつけたのか！」

スティックだった。僕は虚ろな目で声のする方を見た。スティックはマルコの幻影を指差しクレイヴに詰め寄った。アランは目の前に現れたマルコを見上げて呆然している。

「……そうとも」

クク、と笑うとクレイヴはさらに目を血走らせた。

「マルコを洗脳し、お前ら特殊部隊の行った町に火をつけさせたのは私だ——」

「ふっ…ふざけるな！！」それを聞いたスティックは直ぐ様クレイヴに掴みかかった。しかしそれよりも先に漆黒のネズミは地面を跳躍し、間合いを取りケラケラと笑った。

「私を殺すのは無理だよ、お前らみたいな虫ケラじゃあ…ッ！」

「ぬあ——！！」

いつかの様に叫ぶと、スティックは覚醒を始めた。そしてそれに呼応するかのようにアランも覚醒を始めた。

もし吹き抜けでなければ、この洞窟は崩壊していただろう。僕は帯ただしいまでに光を放つ二匹を見つめながら、今だに目の前のジェ

ニーの死が受け入れられなかった。

アランの周りにある空気が、渦のように集約され始め、スティックが地面を刮り貫き持ち上げると、洞窟全体が揺れ始めた。パラパラと粉が降ってくるが、クレイヴは何一つ動じていないようだった。

「は…これが特殊能力ってヤツか………ちよつとは楽しめそうだな」

「……減らず口が叩けるのは今のうちだよクレイヴ……」そう呟くとアランは指先を暗闇の中に潜むクレイヴに向けた。

空気の反動でアランが後ろに吹っ飛ぶと同時に、鋭利な空気の槍が大量に発射された。洞窟中、どこに逃げようと当たる程の量だ。

ウソだろ…逃げ場がない！

瞬時に僕はジェニーの上に覆い被さるようにして地面にはいつくばった。頭上のスレスレを空気の槍が霞め、風圧で耳が少し切れた。洞窟中の空気の流れが変わり、目を細めて辺りを見回すとアランの空気の盾とクレイヴの爪がギリギリといがみあうような音を立てていた。

「ハッ！これがお前らの能力か？ならば、全く……警戒に値しない！」

吐き捨てるようにクレイヴは言った。それを聞いたアランは歯を噛み締めさらに風圧を強めた。埃や砂が凄まじい風圧により地面に押し付けられ、逃げ場を探すように吹き抜けの空へと吹き出す。僕は湿った岩の影にジェニーを運び、おもむろに冷えたヒルトンさんの腕を取った。

すると、不意にキップ隊長の指が足に当たった。

「……？」

「…よく聞けユウキ。ヤツの……クレイヴの狙いはこの洞窟に眠ると言われる宝だ。だから宝を探せば…お前の命までは取らないかも

しれない。だから……」

次の隊長の言葉は、轟音によって掻き消された。素早く振り替えると、スティックが砕いた岩がアランの風で巻きおこる激流に乗って洞窟内を竜のようにウネっていた。岩盤の剥き出す壁をとがった強靱な岩が削りながら飛ぶ。塵が僕の体に吹き付ける。

計算され尽したような動きで飛んでくる槍を避けるクレイヴ。一見防戦一方に見えるも、その黄色い目はまだまだ余力があるとばかりにアランとスティックを見据えていた。その濁った目の先には、スティックの脇に置いてある歴史本があった。僕は思った。

あれを奪われたら――。体を奮い起たせキップ隊長をみ下げる。

「隊長、宝って何なんですか？」

すっかり萎んだ隊長は片目を開き静かに笑った。

「さあな……私にも分からない。ただそれを示唆する何かがある歴史本に載っているのは確かだ……宝は何をも支配する力を持っているとも言われている……もしやネズシティの平和が崩れるかもしれない」隊長は一息つくと、僕の腕を取って呟いた。その手はすっかり冷えきっていた。

「お前が……自らの命とネズシティの市民や仲間の命どちらを選ぶかは好きにしないさ……ただ――」

今までで一番の微笑みを浮かべた隊長は、力強くいった。

「……我が親友、ヒルトンの行為を無駄にはしないで欲しい――」

それを最後に隊長は目を閉じ腕をダランとさせた。

「……」

僕は足に力を込めた。――決めた。

いくらスティックとアランが勘違いして僕に当たっていたとしても、マルコさんが人間だったのに間違いはないし、騙したのはクレイヴだ。

僕は宝等探さない……今ここで彼等と共に戦う。「さあその本を渡せ……」

「――黙れ、だまれ……ッ！」

アランは頭に血が昇っているのか見境なく空気の槍を打ち続けたので、僕は中々三匹の近くに行けなかった。一方のクレイヴは特殊能力を持つ二匹を相手にしているにも関わらず徐々にスティックの懷に潜り込んで行った。

「宝は私のモノだ……！」

下劣な低い声でクレイヴが叫んだかと思うと、ヤツは釘のような牙でおびただしい数の岩槍を打ち砕いた。風よりも早く懷に潜り込まれたスティックは、即座に本に手を伸ばしたが――それよりも早く全身が刃のように鋭いクレイヴの牙に弾かれた。その瞬間、ゆっくりと宙に埃まみれの茶色い体が浮き、次に胸から真っ赤な鮮血が吹き出た。

「スティックッ……！」

スローモーションの様に見えたその光景は、やがて現実に戻り、牙で傷付いたスティックは地面へと転がった。

「ぐあッ……う」

僕より先にアランが駆けよると、肩から胸にかけて出血が止まらず悶え苦しむスティックに言った。

「大丈夫だ……絶対大丈夫だスティック――お前は俺と、故郷に帰るんだろ？」

「ぐッ……あ、――ああ！」

洞窟の地面に、血が流れ出していく。

涙を溢すアランは、震える手で自らの服を千切りスティックの止血を試みた。しかし、血は止まらない。どうやらかなり傷は深いようだった。

やがて洞窟には何の声もしなくなった。悶えていた、スティックの声さえも。

「……スティック？」

アランは親友の頬をつねった。その指は、ガタガタと空気が壊れてしまふんじゃないかという程震えていた。

そして反応がないと気が付くと、親友の血が流れ出て水溜まりのようになつた地面を見て膝を震わせながら立ち上がった。

「――あ、あ、あ……………」

フツと膝から崩れ落ちたアランを、僕はすかさず抱き止めた。

「くそつたれ！！」

僕はガンガンと鐘が鳴るような心臓を押さえた。コメカミがカアツと熱くなる。

今なら――僕は死んでもいい。25D程前までの変わらない日常から、ここまで僕を強くしてくれたのは仲間だ。このネズミ達が死んで、僕が生き残るワケがない。

クレイヴは歴史本を血眼になつて読み耽っていた。

「ハッ……！私に歯向かうから死ぬんだよ馬鹿共が――いや、そんな事はどうでもいい。宝はどこだあ！？財宝の記述は！」

僕は気配を消してヤツの背後に忍び寄った。ヤツは歴史本に夢中だ。僕は確かに……絶対に気配を消したはずだった。しかし次の瞬間クレイヴの漆黒の毛色が視界から消えた。

「！？」

「まだ居たのかカスが……………」

グチ、と牙が肩にめり込む音がした。同時に焼けるような痛みが体を突抜けた。

「うあ……！！」

瞼の裏がチカチカして、赤やら青やら様々な光が何度も見えたり消えたりした。やがて、深く食い込んだ牙が抜かれた。僕はズルリと倒れ込み朦朧とする意識と戦った。

先程、スティックはこれの何倍痛かったのだろうか？

「――やれやれ…しつこいカスだ」

クレイヴが、ほくそえむように口の周りを舐めた。

「…しかし、念の為だな。徹底的に殺しておこう」

そう呟くと、クレイヴは気絶しているアランの方へ向かった。

「やめろ――!!」

僕は振り絞るように叫んだ。しかし、クレイヴは見向きもしない。血が流れ過ぎたのか、頭がクラクラしてきた。地面に赤い液体がにじんでいく。

…結局…僕は誰一人救えないのか。

すごく――カッコ悪いな……

『母さん、今日の夕飯は何?』

…何だこの声――?

『今日は貴方の好きなカレーライスよ。たくさん食べて大きくなるのよ』

母さんと小さい頃の僕だ。

『何で大きくならないといけないの?』

…理由なんかあるワケない――

『……うゝん。ユウキの大切な人を守る為かな?』

……大切な人を、守る為？

『じゃあ、僕が大きくなったらお母さんを守ってあげる！』

『まあ、本当に！？……』

うやむやな記憶はそこで途切れた。

朦朧としていた意識を集中させると、クレイヴがアランの首に爪を立てようとしていた。

…大切な人を、守る為？

消えかけていた目の前の光が、微かにともる。

僕は力の入らない指を握りしめると、近くに落ちていた岩の槍を掴んだ。しっかりと、確かめるように。

……母さん、ちょっとは僕大きくなったかな？

掴んだ槍を、力の限りクレイヴに投げた。

「！？」

僕が死んだと油断したクレイヴはとっさに体を反転させたが、空気を切り裂きながら一直線に飛んだ槍は頬を霞めた。裂けた皮膚より血の球が飛ぶ。

「――まだ生きていたのか……カスが！」

忌々しいとばかりに僕の首ねっこを掴んだクレイヴは牙を剥き出した。

まずい——体から血が流れすぎた：

意識が遠のいたその瞬間、洞窟中の空気が軋み透き通るのような鳴き声が聴こえた。

「何だ!？」

クレイヴが見上げた吹き抜けの空から、キラキラと光りを帯た青い羽が僕の頭にフワリと落ちた。

美しい風を引きつれ舞い降りたその姿。

神々しいまでに青く輝く羽先と軀。羽ばたく度にガラスのように透けた青い羽が洞窟中に散る。肌色の小さな嘴が奏でる全てに触れるような鳴き声。

そして、この世の全ての優しさを詰め込んだような瞳は光の角度により様々な色彩を放ち僕を見据えて揺れていた。

「ドルヴァース……だと？」

「——」

僕は舞い落ちた羽を握り絞めた。羽から滲出る光は僕をつつみこんだ。啞然とするクレイヴを尻目に、ドルヴァースは皆が倒れている岩に長いカギ爪で止まり何度か羽ばたいた。

舞い落ちる羽は空から差し込む光で雪のように輝き、傷付いたみんなの体に触れた瞬間、柔らかな光を放った。

13 チーズ目…終わりのチーズ

「……………」

目を開けると、光の線が繭のように僕を覆っていた。

何かを叫ぶクレイヴの声が聴こえた。

「ハッ！…馬鹿馬鹿しい——ドルヴァースは森と同時に消えたハズだ…！」

僕はふと、『森』という言葉で思いだした。

そういえば森で出会った老ネズミ……ロバートさんは——？
もしかして……。

僕は自分の体に力が戻ってくるのを感じた。光の繭の中は暖かく優しさに満ち溢れて居た。やがて繭は塵のようにキラキラと光ったかと思うと静かに消えた。もう体から血は一滴も流れていない。それどころかまるでバブルフレッシャーに乗った直後のように体が軽いのだ。

体に異変が生じたのは僕だけでなかった。

ドルヴァースの羽に触れた全員……そう、キップ隊長も、ヒルトンさんもジェニーもスティックも。皆寝惚け眼で辺りの様子を探るように体を起こした。「……みんな…！」

僕は瞬時に体を起こし駆け出した。笑顔のスティックに抱きつく。

「ユウキ！…ごめん……俺、何にも知らないでお前に……」

「いいよ……それより今はクレイヴだろ？」

「俺からも謝る……すまなかった、ユウキ」

そう言うのアランは頭を下げた。僕は慌てて首を振った。

生き返ったジェニーは、小さな嘴で滑らかな毛を繕う青い鳥を見とれていた。

「…ドルヴァース……命の鳥」

「命の——鳥」

やがてドルヴァースはキラキラ光る長い尾を揺らしながら空中に舞い上がると、何かを歌うように鳴きながら洞窟の奥へと飛んで行ってしまった。

それを見届けた僕らは、混乱し必死に歴史本を捲るクレイヴを見据えた。

「何で……！ ああ、ドルヴァース……森の象徴とされた命の源である羽を持つ獣である……」

「クレイヴッ！！」

ギョロリとした爬虫類のような黄色の目でヤツは僕らを振り返った。「揃いも揃って生き返り……気安く私の名前を呼ぶんじゃない——カスネズミ共」

クレイヴの歴史本を持つ手が震えている。すっかり生氣を取り戻したキップ隊長は力強く踏み出した。

「どうやら自分の立場をわかっていないようだ」

僕らも隊長の後ろから付いていく。すると洞窟全体が揺れ始めた。今まで何度か洞窟の揺れを体験したが、まるで洞窟を掻き回すような揺れ。思わず僕らは地面に倒れ込み、壁からは岩が剥がれ落ち始めた。

「……ハッ！ 立場がわかって居ないのはお前らだ——私が宝を手にするれば、死ぬのはお前ら等の方だ……！」

多少なりとも動揺している様子のクレイヴは、本を見開き叫んだ。

『いざ、偉大なるレジェンド・我に力を与えん』

次の瞬間、洞窟の全ての壁から岩が剥げ落ち、壁はマリンブルー……まるで宝石のように輝く海の中に入ったように透け、発光した。

「な、何だこれは……宝はどこだ！？ 宝は——ッ！」

クレイヴは狂ったように辺りを探った。

「……一体どうなってるんだ？」

「ふと僕は近くの壁に何かが彫ってあるのに気が付いた。

「ジェニー見て、これ……」

壁にはこう書いてあった。

『この世に唯一無二である宝……それは心優しいモノの中にある存在。つまり宝とは君たちの中にある』

「……」

顔を見合わせた僕とジェニー。それを聞いたクレイヴは目を見開き卒倒した。キップ隊長は肩をすくめた。

「何だ……そういう事か。こりゃ一枚取られたな」

ヒルトンさんはそんなキップ隊長を見て軟らかに微笑んだ。

「……私たちの中にあるもの——か」

辺りを見渡すと、スティックとアランがまた空間に暗闇の穴を開けていた。

「……」

僕は二匹を見据えた。視界がグンと濁って緩んだ。

悲しくなんかない——

「隊長……俺たち自分の国に戻ります」

小さいながらも芯の通ったスティックの声に、僕の横に居た隊長は誇らしげに頷いた。

「ああ……行つてきなさい」

ヒルトンさんも頷いた。

きつと、隊長とヒルトンさんは宝を手に入れた。

じゃあ……僕達は——？

「ユウキ」

後ろからヒルトンさんの声がした。

「確かキミが私と初めて出会った時……迷子だったよね？ ベットの下來た」と

「………ハイ」

ならば、とヒルトンさんは僕の手を取って言った。みんなの視線が

此方を向いた。

「…キミも国に帰るべきだ。私達と一緒にいるべきではない」

ギュッと握られた手に力が籠り、心臓がドクリと唸った。何か悲しいものが近付いているような…そんな空気だった。

「……そうだ」

ゲートの前に居たスティックとアランが駆け寄ってきた。

ヒルトンさんに握られた僕の手を奪い、何かを押し付けた。

「俺たちとお前の…あゝ。恥ずかしいな、とにかく握れや」
言われた通り握る。

「また…会えるよね？」

僕は思ったより声が震えていないのに驚いた。アランは歓迎会以来の弾けるような笑顔を見せた。

「もちろんさ」

間極まったスティックは僕を抱き締めた。それも…あまりの圧力に気がおかしくなりそうな程だ。

「――ユウキ。お前、いい奴だった！今まで特殊部隊に居てお前程お人好しはいなかった！」

チーン、と鼻水を煤る音がした。

するとスティックの上からジェニーもキップ隊長もヒルトンさんも覆い被さって来た。アランは遅れたとぼや気ながら最後に僕にのしかかった。

「その通りだ！また何処かで会おう」

ジェニーが悪戯っぽく言った。

「きつとだ」

ヒルトンさんとキップ隊長が顔をクシャクシュにして笑った。

「みんな――」

しかし暗いゲートが、早くしろとばかりにウンウン唸ったので、僕はあまりじゃれあえなかった。アランは、スティックに言った。

「そろそろ行かないと…ゲートがお怒りだ」

それぞれがそれぞれと、体を離す。

そして僕とスティックとアランはゲートに向かった。
微かに涙で目をにじませたジェニーは、意地を張るように口を曲げた。

「短い間だったが、三匹とも元気でな！」

キップ隊長が言った。いつの間にかヒルトンさんの横にはサラさんが居た。穏やかな表情で微笑んでいる。

「皆さん、元気で！」

僕が叫んだ瞬間、スティックとアランは目の前に現れたマルコさんに驚き、次に笑った。きつと、三匹は一緒に国に帰るんだ。

僕はそう思い、ゲートに足を入れた。

みんな手を降りながら、消えて――……

気が付くと、僕はベットに横たわっていた。カーテンが静かになびく窓からは、オレンジ色の夕日が差し込んでいた。

「……………まじかよ」

僕は今までの事が夢なのかと思った。しかしそんなハズは絶対にない。クレイヴの牙に感じた激痛。

それに――……

「……キ、ユウキ？」

ガタガタと階段を登ってくる音がしたので、慌てて体を起こす。入れ替わりにガチャ、とドアが開き、母さんが顔を出した。眉を潜めて、不思議そうな顔をしている。

「ユウキ？夕食出来たわよ、早く降りてきなさい…」
「あ、うん。わかった——」

ふと机の上を見ると。

そこにはちゃんと

一欠片のチーズが置いてあった。

13チーズ目：終わりのチーズ（後書き）

ようやく終わりました：感想・批評頂けたらとても嬉しいです、

PS、ネズミを見てもあまり叩いたり追い払ったりしてあげないで
下さい（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9056a/>

ネズシティへようこそ！

2010年12月28日14時29分発行